



ダンスホール・ゴスペルの男性イメージとジャマイカの教会コミュニティ  
—男性イメージが集団に与える影響を考察するための概念整理にむけて—

Dancehall Gospel's Male Image and Jamaican Church Communities:  
Conceptual Framework to Study the Influence of the Male Image on Social Groups

二宮 健一 Kenichi Ninomiya

人間圏の探求シリーズ 4

Kyoto Working Papers on Area Studies No.94  
(G-COE Series 92)

June 2010

このグローバル COE ワーキングペーパーシリーズは、下記 G-COE ウェブサイトで閲覧する事が出来ます  
(Japanese webpage)

[http://www.humanosphere.cseas.kyoto-u.ac.jp/staticpages/index.php/working\\_papers](http://www.humanosphere.cseas.kyoto-u.ac.jp/staticpages/index.php/working_papers)

(English webpage)

[http://www.humanosphere.cseas.kyoto-u.ac.jp/en/staticpages/index.php/working\\_papers\\_en](http://www.humanosphere.cseas.kyoto-u.ac.jp/en/staticpages/index.php/working_papers_en)

©2010

〒606-8501

京都市左京区吉田下阿達町 46

京都大学東南アジア研究所

無断複写・複製・転載を禁ず

論文の中で示された内容や意見は、著者個人のものであり、  
東南アジア研究所の見解を示すものではありません。

このワーキングペーパーは、JSPS グローバル COE プログラム (E-4) :  
生存基盤持続型の発展を目指す地域研究拠点 の援助によって出版されたものです。

ダンスホール・ゴスペルの男性イメージとジャマイカの教会コミュニティ  
—男性イメージが集団に与える影響を考察するための概念整理にむけて—

Dancehall Gospel's Male Image and Jamaican Church Communities:  
Conceptual Framework to Study  
the Influence of the Male Image on Social Groups

二宮 健一

人間圏の探求シリーズ 4

Kyoto Working Papers on Area Studies No.94  
JSPS Global COE Program Series 92  
In Search of Sustainable Humansphere in Asia and Africa

June 2010

# ダンスホール・ゴスペルの男性イメージとジャマイカの教会コミュニティ

## 男性イメージが集団に与える影響を考察するための概念整理にむけて \*

二宮 健一\*\*

### Dancehall Gospel's Male Image and Jamaican Church Communities:

### Conceptual Framework to Study the Influence of the Male Image on Social Groups

Kenichi Ninomiya

Dancehall Gospel is a form of Gospel music in Jamaica. As the name suggests, it has the musical character of Dancehall music, which is the mainstream form of popular music in Jamaica. Dancehall Gospel singers are called 'Gospel Deejays'. One of the characteristics which sets Dancehall Gospel apart when it is compared with other forms of gospel music in Jamaica is that while gospel singers and church choirs are predominantly female, most gospel deejays are male.

This paper examines the image of the 'Christian' male, which Dancehall Gospel represents, and considers the influence that it has on Jamaican church communities. This paper also aims to construct a conceptual framework within which to study the influence of the male image on social groups.

Chapter 1 reviews three major perspectives found in Caribbean masculinity studies and shows that they lack effective concepts with which to study the influence of a male image on social groups. Chapter 2 presents the background of Dancehall Gospel. It examines the male image represented by church and Dancehall respectively. Chapter 3 examines the male image created by Gospel Deejays through their stage performances and considers the influence of that male image on church communities in Jamaica. The last chapter makes several notes to construct the conceptual framework to study the influence of the male image on social groups.

## 1. はじめに

ダンスホール・ゴスペルは、ジャマイカに見られるゴスペル音楽の一形態である。その名に表されている通り、これは現地のポピュラー音楽であるダンスホール音楽の要素を取り込んだものである。ダンスホール・ゴスペルの歌い手はゴスペル Deejay と呼ばれる。従来のゴスペル歌手や教会の聖歌隊のメンバーには女性が多いのに対し、ゴスペル Deejay のほとんど

---

\* このワーキング・ペーパーは2010年3月12日から14日に開催されたGCOEプログラム「生存基盤持続型の発展を目指す地域研究拠点」の主催するシンポジウム「人間圏を解き明かす—人間の生存、人びとのつながり」での発表に加筆したものである。

\*\* 神戸大学大学院国際文化学研究所 博士後期課程 Email: ninokendrix@yahoo.co.jp

は男性であるのが特徴の一つである。またそのゴスペル Deejay たちは、本論で見ていくように、ジャマイカのステレオタイプ的な「キリスト教徒」男性のイメージとは異なるキリスト教徒」男性のイメージを持つ男性である。

本論はこのダンスホール・ゴスペルが表象する「キリスト教徒」男性のイメージがジャマイカの教会コミュニティに与える影響を考察する。この考察を通して本論はさらに、男性イメージが集団さらには社会に与える影響を捉えることができる理論的な枠組みを見出すことを目的としている。

男性に関わる事象をジェンダー研究の視角から扱う「男性性研究(masculinity studies)」と呼ばれる一連の研究群がある<sup>1</sup>。本研究もこの研究群に連なるものとして位置付けることができる。ただし、本研究は研究の焦点を「男性性」よりも狭く、「男性イメージ」へと限定している。

ここでは「イメージ」を、箭内匡が美学者の岩城見一を引用しながらいうように、「意識に対して感覚的に現前するもののすべて」であり、「本質的に前-言語的な現象」として捉えておく(箭内 2008: 181, 193)。つまりそれは、メディアや広告などによって視角的に表象されたものも、現実の個人や架空のキャラクターによって体现される全人格的なものも、寓話や説話など聞いた時に想像される心象的なものも含んでいる。

このように「イメージ」を捉えたうえで、「男性イメージ」として本論がみなすのは、「男とはこうあるべき」という呼びかけになりうる(つまりイデオロギー的な性格を帯びうる)イメージである。この点で、日本語でいう「男らしさ」はここでいう「男性イメージ」に近いといえる。

この男性イメージというトピックは、男性性研究の中でも重要な位置を占める。ポストモダン、グローバル化といった言葉で表される状況に加え、フェミニズムも一定の成果をあげたことにより、男性のジェンダーはよりフレキシブルになっている。そのような状況の中で、メディアなどを通して表象される「新しい」男性のイメージは、男性の日常的な実践や規範意識に大きな影響力を持つと考えられるからである。さらにその新しい男性のイメージが特定の集団の男性を代表している場合、それは社会内の集団間の関係に変化を引き起こす可能性も秘めているといえるだろう。

社会変化と男性性の変化の関係を捉えるパースペクティブが必要であることは、社会科学的方法論で男性性の研究を行う研究者によって1990年代から指摘されてきた(cf. Messner 1993, Connell 2005)。人類学者による民族誌的な方法論を用いた男性性研究は、具体的な記述を通して社会と男性性それぞれの変化がどのように関連しているのかを理解することを可能にするだろう。しかしこれまでのところ、人類学者による男性性研究は、ある地域に見られる特徴的な男性性や通文化的にみられる男性性の共通要素などを描出したものが多く、男性性の変化とその社会的な影響に注目したものは少ないようである(cf. Gutmann 1997, ギルモア 1994)。ましてやそれを理論化したものは見られない。

本論で扱うジャマイカは、男性イメージの変化が集団やさらに社会に与える影響を考察す

---

<sup>1</sup>男性性研究の研究対象としての「男性性」という実体があるわけではない。個々の男性性研究の着眼点は、セクシュアリティ、規範、役割など多様である。それぞれの研究者の用いる「男性性」という語が何を意味するところも、この着眼点の違いによって異なってくる。

るフィールドとしててきしている。ジャマイカは歴史的にみれば、奴隷制の時代以来、異人種・異民族間の文化接触の場であった<sup>2</sup>。さらに現在ではアメリカ合衆国への大量の移民や、アメリカの番組を放送するケーブル・テレビやインターネットの普及によって、グローバルな関係性の中に置かれている。さらにフェミニストによる活動やジェンダー研究も1970年代から行われており、1980年代後半からは本論の1章でみるような男性性研究も行われている。このような活動や研究を通じて新しい男性イメージが生まれている可能性は大いにある<sup>3</sup>。

本論は、ジャマイカ社会の中でも、教会コミュニティを取り上げ、そこにおける男性イメージの作用を論じている。教会コミュニティは、2章の冒頭で見るように、ジャマイカにおいて大きな集団である。ジャマイカには教会が多くあり、多くの人が教会と関係した生活を送っている。特にほとんどの人々は幼少期に母親や祖母らに連れられて教会の日曜学校に通う。公立の学校も教会によって設立されたところが多い。こうした環境のなかで、ジャマイカの人々の多くはキリスト教の世界観、倫理観の中で育っている。よって人々が理想的と考える男性イメージも、教会によって提示されたものに影響されている可能性が大きいといえる。これが教会コミュニティに注目する第一の理由である。

教会コミュニティに注目する第二の理由は、教会が男性に向けた運動を行っているからである。それはカンファレンスや路上でのマーチという形で行われている。このような教会の活動がジャマイカ社会のジェンダーに影響を及ぼすことも十分に考えられる。

このような教会の活動でダンスホール・ゴスペルがBGMとして用いられたり、ゲストとして招かれたゴスペルDeejayがパフォーマンスしたりすることも多い。ゴスペルDeejayたちが体現するイメージは、従来の「キリスト教徒」男性のそれとは異なるものであり、それらに対しては教会コミュニティ内でも賛否両論の評価がある。本論では、このゴスペルDeejayたちの男性イメージと、それが教会コミュニティに及ぼす影響について考察する。しかし上で述べたように教会が外部に向けた活動を行っていることや、人々の世界観、倫理観の形成に大きな影響力を持っていること、さらにダンスホール・ゴスペル自体も教会コミュニティの外にリスナーを持つことを考えると、その男性イメージはジャマイカ社会全体に対しても影響力を与えうると考えられる。

またゴスペルDeejayたちが作り出す男性イメージは、キリスト教系のテレビ局・ラジオ局

---

<sup>2</sup> ジャマイカは、1494年に、コロンブスの二度目の航海で「発見」され、スペイン領となった。原住民のアラワク・インディアンは、スペイン人がもたらした疫病と過酷な使役労働で滅亡してしまった。その代替となる労働力として黒人奴隷がアフリカから輸入されるようになった。1655年にはイギリス海軍による侵攻・占領によってジャマイカはイギリス領となり、それ以降は大規模な奴隷制プランテーションによるサトウキビの生産が行なわれた。1834年から38年にかけて段階的に奴隷制が廃止され、その後黒人奴隷に代わる労働力としてインド系、中国系の年季労働者の輸入が開始された。1962年にジャマイカは独立し、英連邦に加盟する立憲君主国家となった。このような歴史を経たジャマイカの人種・民族構成は、2001年の国勢調査（*Jamaica Population Census 2001*）によると黒人が91%、混血が6%、インド系、中国系、白人はそれぞれ1%未満となっている。

<sup>3</sup> 変化の例として、ジャマイカの男性性の特徴の一つとしばしばいわれてきた強い同性愛嫌悪が（Brown et al. 1998: 23）時代とともに変化していることが挙げられる。シェパーズによると、ジャマイカでは1980年代初頭から同性愛嫌悪が強くなったが、1990年代初頭にはすでに中産階級の男性たちの間で同性愛者に対する態度の緩和が見られていた（Chevannes 1993: 38）。さらに現在では、1990年代にジャマイカのポピュラー音楽に溢れていた同性愛者へのパッシングの表現も影をひそめ、さらにはトランス・ジェンダー的なキャラクターの喜劇役者が（嫌悪感を表明する人も多いものの）絶大な人気を博している状況である。このような変化は、アメリカの映画や番組を放送するケーブル・テレビが普及し、アメリカ的な価値観が流入したことや、欧米の人権団体が音楽アーティストたちへ圧力をかけてきたことにも影響されていると考えられる。

やインターネットといった、近年発達したメディアを通して発信されているという点、アメリカのゴスペル音楽文化の影響や海外でのゴスペル・イベントへの出演といったグローバルな関係性のなかにあるという点でも男性イメージと現代的な社会変化との関連性を見るための事例として注目に値するといえる。

本論では、まず2章でジャマイカを中心としたカリブ海地域の男性性研究にみられる三つの代表的なパースペクティブを整理し、それらが男性イメージが集団に与える影響を考察するために有効な概念を備えていないことを確認する。3章では、ダンスホール・ゴスペルの背景の整理を行う。ここでは特に、教会とダンスホールそれぞれがもつ男性イメージがどのようなものであるかを、先行研究をもとに明らかにする。4章ではゴスペルDeejayたちが作り出す男性イメージを彼らのステージ・パフォーマンスの分析を通して明らかにし、それが教会コミュニティにどのような影響を与えているのかを考察する。

本論の議論に入る前に、簡単に用語の説明を行っておきたい。本論では英語の‘masculinity studies’の訳語として「男性性研究」という語をあて、それらの研究の中で用いられる‘manhood’, ‘masculinity’の訳語として「男性性」を当てる。より一般的な「男らしさ」という語を使わないのは、英語の‘manhood’, ‘masculinity’の意味範囲がイメージ、アイデンティティ、価値、規範、セクシュアリティ、ジェンダーのどれをも指すことができる広いものであり、かつ価値中立的に用いられるからである。それに対して日本語の「男らしさ」は肯定的に価値づけされるイメージのみを意味しており、‘manhood’, ‘masculinity’がもつ広い意味範囲を捉えきれない。したがってより価値中立的な「男性性」という語を訳語として選択する。一方で「男性性」という語はその意味範囲の広さゆえに時として議論の輪郭をぼやけさせることにもなりかねない。それを避けるため、本論では訳語以外の箇所では場面に応じて男性イメージ、男性のジェンダー、男性としてのアイデンティティ、男性の性役割、男性のセクシュアリティなどの言葉を使い分けることにする。

## 2. カリブ海地域の男性性研究に見られる三つのパースペクティブ

本章ではカリブ海地域の男性性研究<sup>4</sup>に見られる三つのパースペクティブを整理する。それは、黒人男性が周縁のかどうかという議論の中に見られる男性の位置づけをみるパースペクティブ、西インド諸島大学のプロジェクト研究に見られる、男性の意識を取り上げるパースペクティブ、「霸権的男性性」概念を用いた研究に見られる、男性間の力関係に注目するパースペクティブ、の三つである。そのうえで、それらのパースペクティブが男性イメージが集団に与える影響を考察するために有効な概念を備えていないことを確認する。

ジャマイカをはじめとするカリブ海地域では、1980年代半ばから男性性研究が盛んに行わ

<sup>4</sup> 本論で行うのはジャマイカの状況をめぐる議論でありながら、本章で整理するのはジャマイカを含む「カリブ海地域の」男性性研究である。カリブ海地域の諸国が持つ社会的差異が看過できないにも関わらず、このような広い範囲の先行研究をひとまとめにして扱うのは、現地の研究者たちが「カリブ海地域の男性性 (Caribbean Masculinity)」を考察の単位としていることが多いからである。この地域の男性性研究の中心となってきたのは西インド諸島大学の研究者たちであるが、この大学はカリブ海地域の英語圏諸国が共同で運営し、そのキャンパスも複数国に分散しているユニークな大学である。各キャンパスが連携した研究やシンポジウムが多く行われていることから、「カリブ海地域の男性性」といった広い考察の単位が共有されているのである。

れるようになった。この時期に男性性研究が始まった理由には以下の二つがある。一つ目はジェンダー研究からの要請である<sup>5</sup>。カリブ海地域のジェンダー研究の中では、女性に対する男性からの暴力が特に問題化され、それと連携した取り組みも数多くなされてきたが、それらの取り組みは女性にふるわれる暴力を効果的に減ずるには至らなかった。この苦節を通して、ジェンダー研究者や活動家たちは、現実を変革するためには、「被害者」である女性たちではなく、「加害者」である男性たちを対象とした研究や取り組みが必要だと気づいたのであった（Reddock 2004: xvi-xvii）。男性性研究が始められたもうひとつのきっかけは、1986年に刊行された、西インド諸島大学（the University of the West Indies）の教育心理学者ミラーによる『黒人男性の周縁化（*Marginalization of Black Male*）』をめぐる議論であった。ここではまず、この男性の周縁性をめぐる議論の中に見られるパースペクティブから見ていくことにする。

## 2.1 「周縁的」な男性像

ジャマイカの失業率は高く、貧困地域では日中から路地で集まりドミノなどのゲームをして過ごす男性たちの姿が目につく。一般にはこのような男性たちを指して「周縁的だ」といわれることがあるが、アカデミズムにおいては、1950年代から60年代にかけて行われた家族形態に関する人類学研究がそのような言説を生産した。その代表的なものとして、R.T. スミスによる研究と、E.クラークによる研究を挙げることができる。

1956年に書かれたR.T. スミスによる英領ギアナの黒人家族についての著書は、現在広く用いられている「母親中心家族」<sup>6</sup>という用語を人口に膾炙させたカリブ海地域の家族形態研究の古典であるが、彼による「母親中心家族」の説明の際にも、男性の周縁性が強調されている。

世帯は母親中心的になりがちである。というのも、「母親」の立場にある女性がたいてい集団の事実上のリーダーであり、反対に夫・父親は、法的には世帯集団の主である

<sup>5</sup> カリブ海地域では、1975年に国連が定めた国際女性年に呼応する形で、行政機関や研究機関におけるジェンダー関連の組織の設立が行われた。

<sup>6</sup> 「母親中心家族（matrifocal family）」は、母親や母方の祖母が世帯形成の中心となる拡張家族である。この母親中心家族は、男女の夫婦関係の段階的発展の末に形成されるとされる。男女の夫婦関係は、男性が母親とともに暮らす女性のもとへ訪問する「訪問夫婦（visiting union）」から始まる。多くの場合、この関係の中で夫婦は最初の子供をもうける。そしてその関係が順調に進めば、夫婦は同棲を始め、「慣習法婚（common law marriage）」の段階に入る。「慣習法婚」は法的・宗教的な認可が伴わないということを除けば、法的結婚の状態と何ら変わらない。訪問夫婦の関係は破局してしまうこともしばしばであるのに対し、慣習法婚の関係はより持続的なものである。母親中心家族は、訪問関係のまま女性が子育てを続けるか、慣習法婚の状態から男性が死別、あるいは出稼ぎや他の女性と暮らすための離別などをすることで形成されることとなる。

法的な結婚は、慣習法婚の関係がしばらく続き、関係の安定性が確かめられ、結婚にかかる資金もたくわえられた後に行われる場合が多い。現在では婚外子にも嫡出子同様の権利が認められ、5年以上慣習法婚の関係が続いた妻にも財産の相続権が認められているため、法的な結婚によるメリットはさほどなくなっている。それでも法的な結婚が理想として考えられているのは、それが宗教的に夫婦の関係を認可する儀礼であること、およびそれが社会的な地位をその夫婦にもたらすものであることが理由として挙げられる（Davenport 1961: 427, Chevannes 1993b: 4）。

2001年の国勢調査（*Jamaica Population Census 2001*）によると、ジャマイカの全世帯のうちの39.7%で女性が世帯主となっている。また、登記局による2003年の人口統計（*Vital Statistics 2003*）によると、すべての新生児のうちの83.6%が婚外子として生まれてきている。

にもかかわらず、その集団の内的関係の複合において周縁的であるためである。「周縁的」ということばで私たちが意味するのは、彼がその集団の他の成員と比較的まれにしか交際しないということ、および彼がその集団を結びつける実際の絆のはずれに在るということである (Smith: 1996: 14)。<sup>7</sup>

カリブ海地域の家族形態研究のもうひとつの古典で、ジャマイカを調査地としたものがE. クラークの *My Mother Who Fathered Me* である。この著作では、そのタイトルが示すとおり、彼女が「母方居住家族 (matrilocal family)」と呼ぶジャマイカの下層階級にみられる家族形態での女性の中心性が描き出されると同時に、男性の家族に対する周縁性と無責任さが強調されている。

男性は女性を妊娠させることで自分の生殖能力を証明するとそれで満足し、親となることに伴う義務や義理を必ずしも受け入れない、とクラークは述べる。それらは一般的に女性の責任として受け止められており、もし彼がそれらを承認したり履行したりしなくとも公的な非難は一切無い (Clarke 1966(1957): 96)。父子の関係については、下層階級のコミュニティでは父親は家庭の外で時間を過ごすことが多く、子供との親密な関係を築くことは稀であるという (Clarke 1966(1957): 147)。しつけの面でも、父親は時に感情に任せて子供を叱り、過度の体罰を与えることがあるということを述べている (Clarke 1966(1957): 161)。このようにクラークは、一貫して男性を否定的に描いている。

1950年代 - 60年代の家族形態に関する人類学研究が描いているのは家族 (より正確には世帯) における男性の周縁性であったが、それは同時に社会一般における男性の周縁性をほのめかすものでもあった (Wilson 1969: 70-71)。その後、「無責任」で女性や子供に対して加害者的な男性像は、70年代 - 80年代のジェンダー研究でも引き続き描き出されたと言える。一方「周縁的」な男性像に関しては、1986年に刊行された、西インド諸島大学の教育心理学者ミラーによる『黒人男性の周縁化 (*Marginalization of Black Male*)』によってセンセーショナルな議論が巻き起こされることになった (Miller 1986)。

この著作でミラーが論じたのは、植民地時代に編成されたジャマイカの教育制度は、教育を受けた黒人男性の出現により社会変革が起こされるのを防ぎ、白人男性の支配的地位を存続させるため、意図的に女性に有利なように作り上げられているということであった。現在のジャマイカでは、優秀な中等教育学校への進学率や最高学府である西インド諸島大学への進学率は女子生徒のほうが男子生徒よりも高くなっているが、それはこのような教育制度における男性の周縁化の結果なのだとミラーはいう (Miller 1986: 1-4)。

さらにミラーは、このような黒人男性の周縁化は教育以外の領域でも見られるという。貧困層の家族では女性が世帯主となり男性が周縁的であるということや、教会のコミュニティの大多数が女性であるということ、男性よりも女性に多くの雇用機会が与えられているということがそれにあたる。これらは相互作用し互いに補強しつつ、黒人男性の周縁化を再生産しているという (Miller 1986: 5)。

<sup>7</sup> この著作 *The Matrifocal Family* は著者 R.T. スミスの既刊論文を寄せ集めて再掲する体裁をとっている。ここで引用した箇所はこの著作の1章からのものであるが、この章は1956年に発表された著作 *The Family in British Guiana: Family Structure and Social Status in the Village* からの抜粋されたものである。

同著の刊行後、ミラーが主張しているように本当に男性たちは周縁化されているのかどうかをめぐって、新聞のコラムや投書欄において盛んに議論が交わされた。「黒人男性の周縁化」という言葉はここにおいて独り歩きを始め、フェミニズムと女性の社会進出に対するいわゆるバックラッシュのスローガンとさえなった感がある。

ミラーの論旨は、白人男性によって黒人男性が周縁化されてきたということであった。しかし彼が用いるデータには明らかな偏りがあり、彼の主張を的確に裏付けてはいないため、論旨は不完全なものに終わってしまっている。また、彼の論旨は黒人女性のほうが黒人男性よりも社会的に有利な立場に置かれている（つまり黒人女性によって黒人男性が周縁化されている）と主張しているようにも取れる。ジェンダー研究者たちはこの点に敏感に反応し、この著作をめぐり議論は「本当に黒人男性は、黒人女性と比べて、周縁化されているのか否か」という点に集中している（cf. Figuiera 2004, Chevannes 1999, Parry 2004, Baritteau 2003, Barrow 1998a, Lindsay 2002）。

男性の周縁性をめぐるこれらの議論は、社会の中での男性の位置づけを論じている。そこで問題となるのは男性の学業成績や、役割などであり、男性イメージは問題とされない。また、不完全だったミラーによる黒人男性の周縁化理論を除いては、社会、集団、男性ジェンダーを動的に見るのではなく、固定的に見ている。そのためこのパースペクティブには男性イメージが社会に与える影響を考察するために有効な概念を見出すことはできない。

## 2.2 男性の意識を取り上げたプロジェクト研究

次に見るのは、男性の意識を取り上げるパースペクティブである。このパースペクティブは、カリブ海地域の男性性研究の中心となった、西インド諸島大学（The University of the West Indies / 以下 UWI と略す）の研究者たちによる男性性に関する質的な調査のプロジェクトの中に見出せるものである。1991 年には「カリブ海地域の男性による家族への貢献（The Contribution of Caribbean Men to the Family / 以下 CCMF と略す）」<sup>8</sup>、1993 年には「カリブ海地域のジェンダー社会化プロジェクト（Caribbean Gender Socialization Project / 以下 CGSP と略す）」<sup>9</sup>、1994 年には「カリブ海地域の家族とジェンダー関係の特質（Family and the Quality of the Gender Relations in Caribbean / 以下 FQGRC と略す）」<sup>10</sup>と呼ばれる研究プロジェクトが発足している。

以上の調査プロジェクトのデータを用いた研究では、「周縁的」「無責任」といった従来カリブ海地域の黒人男性に付されたネガティブなイメージの見直しが目指されている。例えば CCMF と GSP の報告書の序文では次のように述べている。

<sup>8</sup> この研究プロジェクトは、ジャマイカ、ガイアナ、ドミニカ国における計 6 つの貧困層のコミュニティでのインタビュー調査を通して、男性たちが夫／父親として家族に対して果たしている役割を明らかにしようとしたものであった。UNICEF 他資金援助を受けて西インド諸島大学のカリブ海地域児童発達センターにより行われた。

<sup>9</sup> この研究プロジェクトでは、前回と同じ 6 つのコミュニティでの質的調査が行われたが、その研究の主眼は成人男性の夫／父親としての家族内役割ではなく、少年から成人男性へという社会化の過程におかれた。UNICEF と西インド諸島大学の社会学・社会福祉学科が中心となって行われた。

<sup>10</sup> この研究プロジェクトは UWI の社会経済研究所によって実施された。ジャマイカ、バルバドス、ドミニカ国を調査地として行われている。

生まれたときから彼らを男性として定義づけるとされる期待に応えるべく、多くの障害にもかかわらず最善を尽くしていると感じている男性たちは、「無責任なカリブ海地域の男性」や「不在の父親」といった一般のステレオタイプでひとまとめにされることに憤慨している (Brown et al. 1998: 3)。

この言葉に表れているように、UWIが行った男性性についての質的調査の研究の調査報告では、社会的困難(主に貧困)のせいで実現は難しいが、男性たちは自分たちに期待される役割を果たそうとする前向きな意識を持っているということが強調されてきた。例えば、上記のCCMFとCGSPに基づく研究論文では、失業、低収入のせいで父親としての経済的な期待に応えられない男性は自己イメージが低くなるのは避けられないものの、家事や養育を分担すると述べられている (Brown et al 1997: 112)。

またこの二つの研究プロジェクトのディレクターを務めたシェバンの論文では、多発する犯罪は、女性との関係を通して男性としてのアイデンティティを獲得しようという欲求と、それを阻む経済的な状況によって引き起こされると見ている。男子にとって、女性との関係を持つことは男性としてのアイデンティティを構築する上で必要であるが、同時に彼らには女性との関係において経済的な役割を果たすことも期待される。しかし十分なトレーニングも受けられないまま学校をドロップ・アウトした若者にとって、女性との関係、ましてや複数の女性との関係において経済的な要求に応えることは難しく、それが若者たちを非合法的な経済活動に向かわせているという<sup>11</sup> (Chevannes 1999: 28)。

さらに同様の例としては、FQGRC で得られたデータを基にしてジェンダー関係に対する少年の意識について書かれたブランシェの論文が挙げられる。ブランシェは、「制限された男性性」という語で調査対象者であるインナー・シティ出身の少年たちの男性性を表現している。彼によると貧困地域の社会経済的な環境の中で、男性たちは生き延びるための苦闘を強いられ、彼らにはタフで好戦的な個人になることが要求される。またそのような環境の中で、彼らのアイデンティティは脆弱であるが、それゆえに自尊心、自負心、自己の能力を信じる感覚を表現し、同時にそれを守るような心理的感性を持っているという。彼がインタビューを行ったインナー・シティの少年たちが複数の女性との交際を希求すること<sup>12</sup>や、交際相手の女性に対して暴力をふるうといった問題は、この「制限された男性性」の表れとして起こっているのだ、とブランシェはいう (Branche 1998: 195, 197)。

UWIのプロジェクト調査による基づいたこれらの研究は、男性がもつ規範意識や理想を取り上げている。これらの研究で扱われている規範や理想は、男性の意識の中でイメージ化さ

<sup>11</sup> 非合法的な活動の中でも、銃犯罪はジャマイカにおける深刻な問題<sup>11</sup>であるが、銃犯罪の多発の原因は銃が若い男性のアイデンティティの象徴となっていることにあるとシェバンはいう。彼によると、「銃の増殖は単に薬物の取引のためのものではなく、男になるとはどういうことなのかの究極的な表現になっていることによるものである。それは他者からの畏怖と敬意の対象であり、自身の自尊心の恐れなき守護者である」 (Chevannes 1998: 30)。

<sup>12</sup> この論文でブランシェは、少年たちが複数の女性と関係を持つことの根底には、女性に対する不信感があるということも明らかにしている。少年たちは、もし一人の女性だけにコミットし献身的になると、その女性からつけこまれ利用されると考えており、それに対する防衛策として複数の女性との関係をもっているという。また彼らは、女性たちも自分たちと同じように複数の男性と関係を持っていることを当たり前のこととして考えている (Branche 1998: 193-94)。

れる場合には、男性イメージとして考えることができるだろう。しかし、ここでの規範や理想は集団や社会に変化を引き起こすものとしてではなく、むしろ集団や社会を固定するものとして捉えられている。たしかに規範や理想だけでは集団や社会に起こる変化は説明できない。それを説明するためには規範や理想に対抗するような男性イメージも考察の範疇に含めなければならない。だが UWI によるプロジェクト調査研究では、カリブ海地域の男性に付与されたネガティブなイメージを見直すという目的のため、考察の単位を「カリブ海地域男性」と大きく設定し、社会内の集団の間にもみられる差異や関係性に配慮せず、単一の規範や理想のみを取り上げる結果になってしまっている。ここには男性イメージが集団や社会に与える影響を考察するために有効な概念は現れない。もちろん UWI のプロジェクト研究以外に目を向ければ、男性存在が内包する差異を軸とした男性性研究もこの地域では行われている。その代表例として、次に見る「覇権的男性性」概念を用いた研究が挙げられる。

### 2.3 覇権的男性性

「覇権的男性性」は、男性性研究の牽引者の一人であるオーストラリア人の社会学者、R. コンネルが 1995 年の著書 *Masculinities* で提唱したものであり、男性性を男性たちの間での差異と力関係を念頭において考察しようとするものである。「どのような時にも、ある男性性のかたちはその他の男性性の形よりも文化的に称揚される」とコンネルは指摘する (Connell 2005 (1995): 77)。その文化的に称揚された男性性を、コンネルはアントニオ・グラムシの覇権の概念を用いて「覇権的男性性」と名付ける。コンネルは「覇権は文化的理想と制度的権力との間に、たとえ個人的にはないにしても集団的に、いくらかの一致が見られるときのみ確立するようだ」という (Connell 2005 (1995): 77)。「覇権的男性性」とは、そのようにして特定の男性が他の男性や女性に対する支配的地位を確保することを可能にする男性性のことなのである。

カリブ海地域の男性性研究にもこの「覇権的男性性」概念は援用されるようになっている。しかしこれは奴隷制時代の白人支配層の男性と黒人奴隷の男性や、植民地時代の白人支配層と黒人中産階級など、男性集団間の明らかな支配 - 被支配の関係を前提とできる場合には有効な考察の枠組みとなっているが (e.g. Beckles 2004: 227, Downes 2004: 130)、そのような明確な支配 - 被支配の関係を見出すことが難しい現在のカリブ海地域社会における男性性の研究では、この枠組みを用いた研究の必要性が主張されているものの (e.g. De Moya 2004: 74-76, Lewis 2004: 257-58) この枠組みを用いた実証的な研究はまだ見られない。

この概念もやはり、男性イメージが集団や社会に与える影響を考察するために適しているとはいえない。その理由は以下の二つである。一つ目は、「覇権」という概念を用いることで、あらかじめ考察の枠組みを限定してしまうことになること。二つ目は、「覇権」概念が喚起する集団間の権力関係が固着しているイメージは、男性イメージが社会に与える影響を動的に考察するために適しているとは考えられないということである。

ここまでみたカリブ海地域の男性性研究に見られる三つのパースペクティブには、男性イメージが集団や社会に与える影響を考察するために適した概念は見出すことができなかった。では、どのような概念がその考察を可能にするのだろうか。本論では、その答えを得るため、まずダンスホール・ゴスペルがどのような男性イメージを表象し、それが教会コミュニティ

にどのような影響を与えているのかを記述し、この事例の考察を思考することを通して適切な概念を模索する。次章ではその準備として、ジャマイカの教会と「キリスト教徒」について、そしてその「キリスト教徒」が通常はダンスホールを批判するにもかかわらず、その要素を取り入れダンスホール・ゴスペルを生産しているという背景について説明する。さらにジャマイカのポピュラー音楽であるダンスホール音楽が表象する男性イメージと、「キリスト教徒」のステレオタイプの男性イメージについて説明する。

### 3. ダンスホール・ゴスペルの背景

#### 3.1 ジャマイカの教会と「キリスト教徒」

(表 1) は、ジャマイカにおける宗教・教派ごとの所属人数と全人口における割合を示したものである<sup>13</sup>。ここでカテゴリーとして挙げられているキリスト教の各派のうち、最も所属人数が多いのは、安息日再臨派 (Seventh Day Adventist) である。しかし、いわゆるペンテコステ系 (Pentecostal および Church of God が名前に含まれるもの) の所属人数を総合すれば、ジャマイカの総人口のじつに 3 分の 1 近くとなり、ジャマイカの最大グループということとなる。

---

<sup>13</sup> ジャマイカは 1494 年にコロンブスによって「発見」されて以来、スペイン領であったが、1655 年にイギリスに奪取され、イギリスの植民地となった。それからしばらくは、英国国教会がこの島の唯一のキリスト教教会であった。彼らの使命は白人プランターのために典拠を行うことであり、黒人に対する布教は行わなかった。18 世紀の後半にモラヴィア派、メソジスト派、バプテスト派などのプロテスタント諸教派が渡来し、白人以外の人口にも伝道を開始した。特に黒人奴隷に対して熱心に伝道を行ったバプテスト教会からは、アフリカ的な信仰形態をとりこんだ土着の「ネイティブ・バプテスト」と呼ばれる教会が派生した。奴隷制の廃止 (1834~38 年) に向けた動きを推し進めることになった 1831 年のサム・シャープの乱や、ジャマイカが直轄植民地へと転換するきっかけとなった 1865 年のモラント・ベイの反乱は、どちらもネイティブ・バプテストのリーダーによって主導された。キリスト教は、白人支配者層のための体制維持に加担する一方で、黒人たちによる抵抗も後押ししてきた。

1860 年代にはイギリスやアメリカで起こった信仰復興がジャマイカにも波及したことで、アフリカ的な信仰形態とキリスト教が習合した「リバイバリスト (Revivalist)」<sup>13</sup> と呼ばれる信仰形態が誕生した。リバイバリストの教会に通うのは貧困層の黒人たちであったが、1920 年代以降にアメリカから伝わったペンテコステ派の諸教会がそのような貧困層の黒人たちを吸収して急激に増加した。それによりリバイバリストの教会の数は減少したものの、現在まで存続している。なお、(表 1) の統計ではリバイバリストはカテゴリーとして設定されていない。

1930 年には、ラスタファリアンと呼ばれる人々が出現した。彼らはエチオピアの新しい皇帝として戴冠したハイレ・セラシエ 1 世の神性を信じ、またドレッド・ロックと呼ばれる束状の髪型が彼らの象徴になっている。キリスト教の聖典である聖書をアフリカ中心的に再解釈することで、彼らが創造した教義や実践に意味づけを行っている。ラスタファリアンの人口は 1960 年代に増加し、70 年代にはボブ・マーリーをはじめとするラスタファリアンのレゲエ歌手の世界的ヒットにより世界中に広がった。そのためファッションや用語法など、文化的な面での影響力はジャマイカ国内外で大きい。(表 1) における人口割合は総人口の 1% 未満と小さいが、これは「ラスタは宗教ではない」と考える人が多いため、実際に信仰を持っている人の数を正確には反映していないものと思われる。

また、オビアマン (Obeah man) と呼ばれる呪術師も奴隷制時代から現在まで存続している。オビアはいわば社会的タブーであり、日常生活の中でオビアについてオープンに語られることは少ないが、ポピュラー音楽の中にはオビアマンやそれに頼る人を叱責する歌詞が散見され、日常生活に潜在するオビアマンの存在感の大きさを察することができる。

(表1) 2001年 宗教所属/教派による人口割合

**Population by Religious Affiliation/Denomination: 2001**

Religious Affiliation/Denomination	Total Population	% of Total
Jamaica	2,595,962	100.00
Anglican	93,612	3.61
Baptist	188,770	7.27
Brethren	24217	0.93
Church of God in Jamaica	124,184	4.78
Church of God of Prophecy	113,225	4.36
New Testament Church of God	163,912	6.31
Other Church of God	215,837	8.31
Jehovah's Witness	44,203	1.70
Methodist	50,024	1.93
Moravian	20,975	0.81
Pentecostal	247,452	9.53
Rastafarian	24,020	0.93
Roman Catholic	67,204	2.59
Seventh Day Adventist	281,353	10.84
United Church	64,154	2.47
Baha'i	279	0.01
Hinduism	1,453	0.06
Islam	1,024	0.04
Judaism	357	0.01
Other Religion/Denomination	253,652	9.77
No Religion/Denomination	543,902	20.95
Not Reported	72,151	2.78

Source: *Jamaica Population Census 2001*, Statistical Institute of Jamaica

(表2) 2001年 宗教所属/教派の人口割合(男女別)

**Population by Sex and Religious  
Affiliation/Denomination by Parish**

Parish and Religious Affiliation/Denomination	Total	Male	Female
<b>All Jamaica</b>	<b>2,595,962</b>	<b>1,275,670</b>	<b>1,320,292</b>
Anglican	93,612	42,693	50,919
Baptist	188,770	84,460	104,310
Brethren	24,217	10,626	13,591
Church of God in Jamaica	124,184	52,320	71,864
Church of God of Prophecy	113,225	49,734	63,492
New Testament Church of God	163,912	71,158	92,754
Other Church of God	215,837	93,310	122,527
Jehovah's Witness	44,203	18,411	25,792
Methodist	50,024	22,248	27,776
Moravian	20,975	9,746	11,228
Pentecostal	247,452	105,637	141,815
Rastafarian	24,020	20,610	3,410
Roman Catholic	67,204	31,248	35,956
Seventh Day Adventist	281,353	127,318	154,035
United Church	64,154	28,165	35,988
Baha'i	279	146	133
Hinduism	1,453	825	628
Islam	1,024	676	348
Judaism	357	193	165
Other Religion/Denomination	253,652	110,892	142,761
No Religion/Denomination	543,902	357,637	186,265
Not Reported	72,151	37,617	34,534

Source: *Jamaica Population Census 2001*, Statistical Institute of Jamaica

さらに、「無教派 ( non-denominational )」の教会のなかには、ペンテコステ派ではないがそれに近い要素を持つ教会が多い。無教派の教会の規模は大小様々である。表1では、「その他の宗教 / 教派 ( Other Religion/denomination )」と回答した者が約 10 パーセントいるが、ここには、このような無教派の教会に通う人々と、選択項目として名前が挙げられていない小規模な教派の教会に通う人々が多く含まれているものと考えられる。

また、「どのような宗教 / 教派もなし ( No Religion/denomination )」と回答した者が約 20 パーセントもいるが、これはいわゆる「無神論者 ( atheist )」の多さを表すものではないということに注意しなければいけない。この調査の質問文は、「あなたの宗教所属 ( affiliation ) や教派は何ですか？」となっており、この「所属」が何を意味するのかが説明されていない。そのため、特定の教会に通っていない人々は、たとえ聖書に書かれているような神の存在を信じていたとしても「なし」と回答した可能性が高い。筆者のこれまでの経験では、無神論的な世界観をもっているジャマイカ人は非常に少ないと思われる。

表2は、表1の統計が男女別であらわされたものである。この表からは、キリスト教各教派の「所属者」は女性のほうが男性よりも1割から4割ほど多いことがわかる。男性は、キリスト教以外の宗教に女性よりも多く「所属」していることがわかるが、特に目立つのは「どのような宗教 / 教派もなし」との回答者に男性が圧倒的に多く、女性の約2倍となっていることである。これは、男性のほうが女性よりも教会から遠ざかりがちであるという傾向を表している。実際に教会の日曜礼拝の参列者を見ると、男性は全体の3分の1に満たないことが多い。

「キリスト教徒」の男性の数は、この表が各教派に「所属」する人数として示すものの総和よりも少ない。先にも述べたとおり、上の表は宗教 / 教派への「所属」というあいまいな基準を用いた統計の結果であり、人々の宗教的アイデンティティを正確に反映したものではない。ジャマイカの人々のほとんどは、すでに述べたように、キリスト教的な神の存在を信じている。しかしこのような信心を持っていたとしても、彼は自らを「キリスト教徒」だと考えるわけではない。「キリスト教徒とはイエスを救い主として受け入れた者のことだ」という説明はジャマイカではよく聞かれる。この説明には、そのようにイエスを救い主として受け入れることで、その人は変容し、「罪深い」生活を避け、神の教えにしたがった生き方をするようになる、という考えが伴っている<sup>14</sup>。教会に通っている人であっても、「罪深い」生活をおくっていると自認する者は、自分を「キリスト教徒」ではなく「教会に行く者 ( church go-er )」と表現することがある。

「キリスト教徒」が避けるべき「罪」は多岐にわたり、またそれは明確に規定されているわけではないが、礼拝などで特によく取り上げられるのは、「婚前性交渉 ( fornication )」「婚外性交渉 ( adultery )」といった性的な罪である。1章で述べたように、ジャマイカでは80%以上の新生児が婚外子として生まれてきていることに表れているように、これらはジャマイカで非常に優勢で慣習的な「罪」である。それゆえこれらの性的な罪を避けることができる

<sup>14</sup> このように考える傾向は福音主義的なプロテスタント諸教派に広く見られるものであるが、ジャマイカの場合は回心体験と聖霊による洗礼の体験を重要視するペンテコステ派が多数派であることによって強められていると言える。

かどうか、「キリスト教徒」としてのアイデンティティを持つことができるかどうかを大きく左右しているといえる。

### 3.2 ダンスホール・ゴスペル

ダンスホール・ゴスペル<sup>15</sup>とは、ジャマイカのポピュラー音楽であるダンスホール音楽の音楽的技法を使ってキリスト教的なメッセージを歌う音楽である。

ジャマイカでは、「ダンスホール (danehall)」という語は、二つの意味を持つ。一つは音楽ジャンルとしてのダンスホールである。ここでは便宜的にこれを「ダンスホール音楽」と呼ぶことにする。ジャマイカのポピュラー音楽は、1950年代後半からのスカ (Ska)、1960年代後半からのロック・ステディ (Rock Steady)、レゲエ (Reggae)、そして1980年代後半からのダンスホール音楽、という形で新しい流行の形態を作り出してきた。レゲエからダンスホールへの音楽形態の変化は、主にデジタル機器による作曲技術の流入によって促されたといわれている。ダンスホール音楽の音楽的特徴としては、リディム (Riddim) と呼ばれるデジタル録音されたリズム・トラックに載せて Deejay (ディー・ジェイ)<sup>16</sup> と呼ばれる歌手が歌うということが挙げられる。Deejay の歌唱法は、アメリカのヒップ・ホップにおけるラッパーの歌唱法と似ているが、ジャマイカのクレオール言語であるパトワ語 (Patois) が英語よりも安定した音程を持つため、単純ではあるがメロディを持つ歌唱法になっている。歌詞の面では「スラックネス (slackness)」と呼ばれる性的な内容を露骨に歌うものや、「ガン・リリック (gun lyric)」と呼ばれる、銃を使ったギャング抗争を描写したり、銃を比喩的に使って自分の能力を表現するものが多く、これらはスカやレゲエに親しんできた年配の人々や、本論でみる「キリスト教徒」たちからの批判的的となっている。

ダンスホールという語が意味するもう一つのものは、ダンスのための場である。ここではこれを便宜的に「ダンスホール空間」と呼ぶことにする。これは「セッション (session)」、あるいは単に「ダンス」「パーティ」とも呼ばれる。このようなダンスの場は、「サウンド・システム (sound system)」と呼ばれる巨大なスピーカーセットを含む音響設備を路上や広場に設置することで作り出される。このような形のダンスホールは、第二次世界大戦後のイギリスへのミュージシャンたちの移出や、レコード、音響機材、それを扱う技術の流入などの要因によって誕生したといわれる (Stolzoff 2000: 41-43)。

主都キングストンでは、毎晩あちこちに大小のダンスホール空間が出現する。ダンスホール空間では次々と流行のダンスが誕生するが、その中には *Dutty Wine* (Dutty=下品な、汚い。Wine=腰をくねらす動き)、*Hot a Wuk* (Wuk= Work。性交の隠語)、*Daggarin'* (突き刺すこと。激しい性交の隠語) などという名称にみられるように性的な含意を持つものも多い。着飾っ

<sup>15</sup> 本稿で用いる資料は主に2008年8月から2009年8月の間に行ったジャマイカ首都キングストンでの現地調査で得られたものである。この調査ではゴスペル・コンサートや伝道集会での観察や、ゴスペル Deejay たちとのつき合いの中での彼らの音楽活動や日常の観察、彼らの作品の収集、教会関係者やゴスペル関係者に対するインタビューを行った。なかでも、キングストンのインナー・シティにサウンド・システムを設置し、ダンスホール・ゴスペルの音源やゴスペル Deejay のパフォーマンスを通じた伝道を行っているプレイズ・ハウス・ボンバーズ (Prayz House Bombards) というグループの活動には繰り返し参加した。

<sup>16</sup> 日本などで言うラジオ DJ やクラブ DJ にあたる、音源を選択して機材にかける担当者はジャマイカでは「セレクター (selector)」と呼ばれることが多い。本論ではジャマイカで言う「ディー・ジェイ」に Deejay という表記をあてることで、彼らが一般に言われる DJ とは異なる存在であることを強調する。

て集まる若者たちの中には奇抜なファッションの者も少なくない。特に女性は肌の露出度の高い服を着た人が多い。また、そこではアルコール類やタバコの販売はもちろん、マリファナの販売や喫煙も半ば公然と行われていることが多い。これらの点はダンスホール空間が「キリスト教徒」から批判される所以となっている。

ダンスホール音楽とダンスホール空間はもちろん相互に結びついており、ひとつのダンスホール文化を形成している。ダンスホール空間でサウンド・システムが流す曲の多くがダンスホール音楽であり、有名 Deejay たちの中には新しいダンスをレクチャーするかのような曲を作り、それがダンスホール空間で新しい流行のダンスを生み出すことも多い。

ジャマイカにおいて、ラジオやテレビで放送され、CD-R にコピーされて路上で売られるダンスホール音楽は主要な娯楽文化となっているといえる。タブロイド紙でも人気 Deejay たちの動向を扱った記事が大きな割合を占め、ダンスホール文化の社会的影響の大きさ、人々の関心の高さを物語っている。そのなかでも特に貧困層の人々にとっては近隣で行われるダンスホール空間は最も身近な娯楽となっている。

ダンスホール文化における「スラックネス」<sup>1</sup>、「ガン・リリック」<sup>2</sup> 性的な含意を持つダンス、その他の多くの要素がキリスト教的な倫理にそぐわず、「キリスト教徒」の批判の対象となっている。ダンスホールはしばしば教会における語りのなかでも「罪」や「世のこと (world)」を象徴するもののように用いられており、また牧師の説教の中で特定の Deejay の名前が挙げられ批判されることもある。ジャマイカで多数派となっているペンテコステ派の教会では、救済 / 悪魔祓い (deliverance) がしばしば行われるが、そこではダンスホールを「悪魔が支配する空間」とする表現すら聞かれる。

ところがダンスホール・ゴスペルはダンスホールのパフォーマンスの形式を、「キリスト教徒」が用いている。ダンスホール・ゴスペルでは、「ゴスペル Deejay」と呼ばれる歌手たちが、通常の Deejay と同じような音源に乗せ、同じような歌い方をするのだが、彼らが歌うのはキリスト教的メッセージである。なお、教会の聖歌隊やゴスペル・シンガーには女性が多いのに対し、ゴスペル Deejay のほとんどは、世俗の Deejay がそうであるように、男性である。多くのゴスペル Deejay は、ペンテコステ派や、その影響を受けたカリスマ的な無教派の教会に通っている。

1990 年代後半に、それまでにすでに世界的な名声を築いていた何名かの Deejay が「キリスト教徒」となったことで、Deejay の歌唱法で歌われるゴスペルの生産が始まった。当時はまだ「ダンスホール・ゴスペル」とは呼ばれておらず、より穏やかな響きをもつ「レゲエ・ゴスペル」と呼ばれていたものの、この時期に Deejay の歌唱法で歌われるゴスペルが一つの音楽的な立場として認知され、また商業化されるようになったといえる。

ゴスペル Deejay たちの活動の場は世俗のダンスホールとは別にある。彼らのパフォーマンスは主に教会やキリスト教団体が行う伝道集会や催しで行われ、ゴスペル・シンガーや教会の聖歌隊と場を共有している。彼らのメディア露出は、キリスト教系のテレビ局やラジオ局、あるいは早朝や週末の各局のゴスペル番組に限られている。彼らの曲が世俗の音楽チャートに登場することも珍しく、彼らが世俗のアーティストに混じってステージ・ショーに出演する機会も少ない。

現在ある程度の名声を得ているゴスペル Deejay たちの多くは、回心前にも Deejay とし

て活動していた経歴を持っている。その中には、かつてキリスト教的な倫理からは程遠いギャング活動や薬物摂取や性関係に手を染めていた経験を持ち、その経験について歌や語りの中で積極的に言及する者も少なくない。しかし現在は、「キリスト教徒」になる以前に Deejay として活動した経験がなくともゴスペル Deejay として活動を始める「キリスト教徒」の若者も増えており、全体としてゴスペル Deejay の数は増えつつある。

彼らが体現する男性イメージはダンスホール文化的なものや教会文化的なものに影響されたものとして考えられるが、それを理解するためにはダンスホールと教会がそれぞれどのような男性イメージを提示しているのかを見ておかななくてはならない。

### 3.3 ダンスホールの男性イメージ

教会がダンスホールを非難する主な原因は、「ガン・リリック」や「スラックネス」と呼ばれる表現上の特徴や、ダンスホール空間に見られる飲酒、タバコやマリファナの喫煙、性的な含意のあるダンス、アクセサリーの過剰な着用や肌の露出を伴うファッションなどにあるが、ダンスホール文化を体現する主要なエージェントである Deejay たちの人格的なイメージが教会の人々から批判されることも少なくない。

Deejay たちが体現する男性イメージは様々であり、それを類型化する研究者もいるが(e.g. Stolzoff 2000: 163-68, Hope 2006: 31-32) その中でも違法者(outlaw)的な存在に同一化した男性イメージの表現は最も代表的なものとして扱われている。ジャマイカでは、いわゆる悪漢の人物を指して、「バッドマン(bad man)」という言葉が使われるが、ガン・リリックを歌う Deejay たちもしばしばバッドマンを自称する。クーパーはそのような性向を「バッドマニズム(badmanism)」と呼ぶ。彼女によるとバッドマニズムとは、「輸入映画のヒーローや悪党の服装面とイデオロギー面での「スタイル」を、ジャマイカの若者たちが模倣し適合させることを学び、複雑な社会化の過程の中で精練された演劇的提示(theatrical pose)である( Cooper 2004: 146-47)」。また、クーパーは、バッドマニズムがもつ双価性についても説明している。このようなハリウッド映画の影響の他に、「隷属させるための鞭打ちに屈することを拒否したアフリカ系奴隷の人々の反逆的エネルギーに起源を持つ、英雄的な「バッドネス」の土着的伝統も存在する」( Cooper 2004: 147) 。バッドマニズムは、それ自体に対する価値判断を簡単には許さないようなものなのである。

ホープはバッドマン Deejay は男性の力のシンボルである銃について歌い、ダンスホール暴力や銃のイメージとの結びつきを増加させているという(Hope 2006: 90) 。特に 1998 年前後から広く使われるようになった「シャッタ」<sup>17</sup>という語が表象するのは力、攻撃性、強さを持つ個人のイメージであるのに加え、彼が持つ銃は「硬く、ファロスの力一象徴的で永久に直立しているペニス」のイメージを宿している(Hope 2006: 96) 。若い児童生徒の間でも、男女を問わず、「シャッタ」という形容が地位と賞賛を表すものとして好んで使われているという(Hope 2006:97) 。

ストルゾフによれば、ジャマイカ人には国家権力に挑戦する無法者(outlaw)を好む傾向が昔からあるが、現在ではギャングスタたち(gangsters)が、犯罪行為も行う一方で、このよう

<sup>17</sup> 「シャッタ」は英語の 'Shooter' にあたるジャマイカのクレオール語彙であり、ギャング集団に属するガンマンのことである。

な英雄的な役割を果たしているという( Stolzoff 2000: 10 )。Deejay やシンガーたちはその歌の中でギャングスタの生活をロマン化し、またそのパフォーマンスや日常生活を通してギャングスタ的な役を作り上げる( Stolzoff 2000: 11 )。

力の男性的象徴( 女性、車、金 )の派手な表示と望む結果を達成するためには暴力の行使もいとわないことに基づくギャングスタのライフスタイルは、ゲッターの何千もの若者男性にとってよい生活のモデルとなってきた。それゆえギャングスタの人物像はダンスホールのパフォーマンスの中心的テーマとなってきた( Stolzoff 2000: 11 )。

これらの研究者たちが注目する「バッドマン」「シャッタ」「ギャングスタ」のイメージを体現する傾向を「バッドマニズム」として括り、ダンスホール文化に典型的に見られる男性イメージとして考えることができるだろう。

### 3.4 「キリスト教徒」の男性イメージ

ダンスホールに見られる「バッドマニズム」が若い男性たちの間で賞賛されるのに対し、「キリスト教徒」の男性イメージは一般に彼らの間で軽侮される傾向がある。ジャマイカのペンテコステ派についてジェンダー的な視点から調査研究を行ったオースティン＝ブルースは、回心してペンテコステ派の「キリスト教徒」になる男性は男らしさを表現する方法となる結婚を伴わない性的関係、ギャンブル、飲酒、喫煙などを「罪深いもの」として放棄しなければいけないのでアイデンティティに難題を受けるのだという( Austin-Broos 1997: 123 )。加えて、ある福音派教会の牧師の論文によると、教会での活動は感情の表出を伴う「ソフト」で「女っぽい」ものであり、学校でのようにじっと座って話を聞いていなければいけない「子供っぽい」ものであるということもそこへ通う男性たちの評価を低くしている<sup>18</sup>( Vassel 1997: 24, 30-31 )。回心して「キリスト教徒」になったときに周囲の男性たちから嘲笑されたという語りは私のフィールドワーク中にもよく聞かれるものであった。一方で、説教師や牧師といったリーダー的な地位にある男性に関しては、彼らが相反する二つの価値体系をしばしば両方体現する存在だということが言われてきた。

人類学者のウィルソンは、カリブ海地域の民族誌を資料として、この地域の社会には「名声(reputation)」「尊敬(respectability)」という言葉で象徴される二つの価値体系が存在していると論じたが<sup>19</sup>( Wilson 1969: 70 )。彼は説教師をその二つの価値体系を両方体現する存在として捉えている。

多くの場合、最も放蕩な者が最も活動的な改宗者( proselytisers )や説教師( preacher )

<sup>18</sup> ジャマイカでは、教会の集まりでは女性が圧倒的な多数である。この牧師は自身の教会の教会員における男性の割合は17パーセントだというのが、これはジャマイカの教会においては一般的な数字だと思われる。

<sup>19</sup> この価値体系の区分は、その後のカリブ海地域文化の研究でも頻繁に参照される理解モデルとなった影響力の大きなものであった。「名声」という言葉で象徴される価値体系は、主に男性によって体現されるものとされている。これは仲間内での名声を希求するものであり、その名声は主に、社会の法的システムを蝕み、それに背き、それを出し抜くことのうまさによって得ることができる( Wilson 1969: 80-81 )。一方、主に女性が体現するとされる「尊敬」という価値体系は、教会が提示するような法的道徳性を体現することによって実現されるものであるとされている( Wilson 1969: 78 )。

になる。それゆえある意味では説教師の地位はしばしば最も高い「名声」と「尊敬」の地位を表している。「名声」が「尊敬」に力を付加している。これは価値体系の間での重複が見られる例だと言える (Wilson 1969: 78)。

シェバンズはジャマイカの賭け事、「ドロップ・パン(Drop Pan)」のシンボリズムについての研究において、民衆の間では牧師が性的な力と宗教的な力をあわせ持った存在として想像されているということを説明している<sup>20</sup>。

多くの人考えるように、会衆の宗教的リーダーである男性のポジションは、鶏の群れの中にある雄鶏のアナログである。……ジャマイカの宗教生活は、聖職者とその会衆の女性メンバーの間の禁じられた性行為のうわさや非難で満ちみちている (Chavannes 1989: 47-48)。

オースティン＝ブルースは、女性が男性よりも性的な罪を犯しやすい存在であることを説教の中などで強調し、彼女たちが罪を犯さないよう管理しながら、自らは性的な誘惑を良く知るものであるかのように語り、女性教会員たちからもしばしば性的な魅力を持つ男性としてまなざされる牧師は、性的なものと霊的なものが直列連結された存在だということ (Austin-Broos 1997: 154-57)。

このように「キリスト教徒」の男性イメージは、一般的には「ソフト」であり、牧師や説教師などのリーダー的なポジションにある者に関しては「キリスト教徒」が表向きには抑制しようとしている力を含みこんだアンビバレントなものであることが指摘できる。

本章でみたように教会とダンスホールは異なる男性イメージをもっている。では、「キリスト教徒」によって生産され、主に教会によって消費されるものでありながら、ダンスホールの要素を取り込んだものでもあるダンスホール・ゴスペルは、どのような男性イメージを作り出しているのだろうか。次章ではまず二人のゴスペル Deejay のパフォーマンスを例として、そこに見られる男性イメージの構築を考察し、次にそれが教会コミュニティに及ぼす影響について考察する。

#### 4. ゴスペル Deejay のパフォーマンスとその影響

##### 4.1 ガディ・ガディのパフォーマンス

ガディ・ガディは私が現地調査をしていた 2008 年から 2009 年にかけて、ジャマイカで最も人気があり、知名度も高いゴスペル Deejay であった。この時期の彼は、伝統的な賛美歌をリメイクした 'Chaka Chi' という曲が大ヒットさせており、大手家具店の CM にも出演するなど、ゴスペル・アーティストとしては異例の活躍をしていた。多くのゴスペル・コンサートで、

<sup>20</sup> 「ドロップ・パン」では、人々が 36 の数字の中から賭ける数字を選ぶ際に参照する数字のシンボリズムの表があるのだが、そこでは「牧師」と「男らしさ (masculinity)」が同じ 29 で象徴され、祭壇と男性器 (phallus) が 31 で、聖書と女性器 (vagina) が 35 で象徴されている。

目玉アーティストとして出演者ラインナップの最後に配され、告知ポスターには彼の写真が大きく載せられていた。

その風貌は、決してハンサムとはいえない。多少ふくよかな体系をした大柄な男性である。下膨れの顔をしているうえに、口を開けると歯並びも悪い。常にサングラスをかけている<sup>21</sup>。クールさを演出するサングラスとポーカーフェイスが、顔全体の不細工さを隠しきれていないところがコミカルな印象も与える。彼自身もステージの上で、「俺があんまり醜いから、人々は『神様が俺を造ったときに材料が足りなかったんだ』って言ったものさ」と笑いのネタにすることもある。

彼は1999年に回心し、ゴスペルDeejayとして活動をスタートしている。現在までに彼は3枚のアルバムCDを発行している。アルバムのジャケットではそれぞれ迷彩柄の軍服、カウボーイ風の上下スーツ、牧師風の詰襟シャツなど、コスチューム風の服装に身を包んでいるが、小さなステージや伝道集会に現れるときには、軽く模様の入ったシャツにジーンズという出で立ちのことが多い。胸にはいつも十字架のネックレスをつけ、腕にはブレスレットをはめている。

彼のDeejayスタイルは歯切れのよい早口であり、他のゴスペルDeejayたちと比べても技術の高さを感じさせる。加えてステージ上の彼は卓越したコメディアンでもある。伝道集会などでは、歌よりも話のほうが長いこともあるほど。巧みに声色を変え、ふんだんにジェスチャーを使い、観衆を大いに笑わせる。

彼は1971年生まれ。良い両親のもとに育ち、小さい頃には教会に通っていたという。彼の弟で同じくゴスペルDeejayをしているライアン・マーク(Ryan Mark)によると、その家族は「豊かでも貧しくもない、平均的な家族」だったという。5人兄弟がいて、全員同じ両親からの子供だということから、母親は「キリスト教徒」として婚前性交渉を避けてきた女性であろうことが想像できる。父親はよく大きなサウンド・システムを呼び、地域でダンスホールを開いていたという。彼は幼い頃から、キリスト教とダンスホールの影響を強く受けて育ったことがうかがえる。

ガディ・ガディは13歳のときに早くもDeejayとして有名プロデューサー「スライ・アンド・ロビー(Sly and Robbie)」のもとで初レコーディングを体験している。高校を卒業し、電気技師として2年間働いた後、仕事を辞めて本格的にDeejay活動に専念するようになった。当時の彼はスネーク・マン(Snake Man)という名を使っており、トップ・クラスのDeejayたちに混じって活動していたが、ヒット曲には恵まれなかった。

同時に彼は、キングストン内にあるカッサバ・ピース(Cassava Piece)という貧困地域で「墓場団(Grave Yard Crew)」というギャングのリーダーとなっていた。弟のライアン・マークによると、それは彼の悪い友人たちの影響を受けた結果だという。

彼は1999年に回心し、「キリスト教徒」になるが、その経緯についての語りにはいくつかのヴァリエーションがある。2007年8月に著者が行ったインタビューでは、その回心のきっかけは、同じギャングの仲間たちが次々と撃たれて死んでいく<sup>22</sup>のを見るにつけ、次は自分

<sup>21</sup> 筆者がインタビューをした際に間近で見ると、サングラスの奥の目は障害を抱えているようにも見受けられた。それを隠すためにサングラスをかけているのかもしれない。

<sup>22</sup> 彼が回心したのは1999年であったが、その2年前の1997年はジャマイカの殺人事件発生率が世界最多と

の番なのではないか、自分が死んだらその魂は一体どこに横たわるのか、と考えるようになったことにあるという。そして彼はこのままでは自分は地獄に行くと考えようになる。

俺は当時レゲエ・アーティストとして「スラックネス」とか「ガン・リリックス」をたくさんやったり、犯罪と暴力を促進していた。そこへ聖書の記述がこう言ってたんだ。「どんなつまらない言葉に対しても、その者は責任を取らなくてはならないだろう」<sup>23</sup>ってね。だから俺は怖くなったんだ。俺の命。俺の魂。それが悪魔の地獄に行こうとしているのを知ったんだよ。だからこのライフスタイルはもういやだ、って思った。

一方、ある教会の催しで彼がステージ上で説教をした際には、これとは異なる内容の語りがなされた。そこで語られたのは、彼を妬んだ同じギャングの友人によって殺されそうになった。それにショックを受けた彼はそれを期に友人と縁を切ってイエスを親友とし、彼に仕える決心をした。そしてすぐに教会に行き、キリストに人生を捧げた、という内容である。

さらに、これらとはまた異なる記述が彼のmyspace<sup>24</sup>上のプロフィールではなされている。それによると、ある夜テレビの宗教番組を見ていた彼に罪の自覚が訪れ、彼はひざまずいて神に祈り始めた。そして世俗のDeejayであることを止め、教会に通い始め、ペンテコステ系の教会で洗礼を受けている。

彼の回心の経緯をめぐるこれらの語りは、相互に矛盾するものではないかもしれないが、一つの出来事に関する語り、その時の状況に合わせて、異なる形で現れてくる可能性を示している。

ここでは、ジャマイカで最大規模のゴスペル・コンサートである「ファン・イン・ザ・サン(Fun in the Sun)」<sup>25</sup>でのガディ・ガディのパフォーマンスの様子考察する。この日、ガディ・ガディは最後から2番目のパフォーマーであった。模様に入った白い三つ揃えのスーツを着ている。彼はこの日、数曲をパフォーマンスをしたが、以下はそのうち「罪のなさ(Sinless)」をパフォーマンスしている際の様子である。

ガディ・ガディはステージの前方に立ち、片手にはマイクを、もう片方の手には白い

---

言われるほどにまで高まり、危機感が社会に広がっていた時期であった。

<sup>23</sup> マタイによる福音書 12章 36-37節からの引用。「言うておくが、人は自分の話したつまらない言葉にもすべて、裁きの日には責任を問われる。あなたは、自分の言葉によって義とされ、自分の言葉によって罪ある者とされる。」

<sup>24</sup> Myspace(My Space)はいわゆるソーシャル・ネットワーキング・サービス(SNS)ですが、アーティスト向けのサービスを行っており、利用者が自分の開設したページを大幅にデザイン変更できたり、自分の楽曲やビデオをアップロードできたりする。アーティストを自認する者の多いジャマイカでは、myspaceは非常にポピュラーであり、私が出会ったゴスペルDeejayのほぼすべて自分のmyspaceを開設し、それを使った情報発信を重要なプロモーション活動として考えていた。

<sup>25</sup> このコンサートは、毎年春休みのシーズンに行なわれているもので、ステージや音響設備の規模は国内最大級であるが、入場料は無料である。そのため、多くの観客が集まる。普通のコンサートとの違いは、アルコール飲料の販売ブースが無いこと。だが、著者が2009年3月に西インド諸島大学の運動グラウンドで行なわれたものに足を運んだ際には、そこかしこからマリファナの香りが漂っていた。集まっているのは、普段教会に通っているような人ばかりではないようであった。この会場から発される音は、近隣に広がる貧困地域にこだまする。その音につられてやってきたという風情の人も少なくなかった。もちろんキングストンから遠く離れた都市部からの送迎バスでやってきた人もいるなど、このコンサートを目当てに遠くから足を運んできた人もいる。

ハンカチを握り締めている。はじめガディ・ガディは、少し身をかがめ、声のトーンを下げて歌っている。バンドも彼に合わせて音量を落として静かに演奏している。「罪は政治家たちに子猫 (puss) のように盗ませる。そして自分の国を貶しあい (cuss-cuss) みたいに安く売り渡すんだ。」ここでガディ・ガディはぐっと背すじを伸ばし、叫ぶようにして歌い始める。「罪は女の子たちにここから上を (right ya so come up) 白くさせる！」このときガディ・ガディはハンカチを持ったほうの手で腰のあたりから頭までを指差す。「で、この下はブレッド・フルーツ<sup>26</sup>が焦げあがったみたいに黒いんだよ！」彼は自分の足元を指差しながら叫ぶ。これは薬品を使った肌の漂白 (bleaching) に対する批判である。注意深く聞いていた観客からは大きな反応が返される。歓声があがり、多くの人飛び跳ねている。手に持ったタオルや国旗を頭上で振る人も多い。ガディ・ガディはそのままコーラス部分を歌う。コーラス部分が終わると、くるっと振り返り、バンドに向かって、「音量 (level) ! 音量！」と指示を出し、音量を再び下げさせる。再び観客のほうに向いたガディ・ガディは、「聞けよ。ちょっと待って。二人の男が一緒に寝るべきじゃないと思う人は全員、こうやって手を挙げて。」と、自ら片手を挙げてみせながら観客に呼びかける。多くの方はそれに応えて手を掲げながら歓声が上がる。口笛も鳴らされている。興奮気味の観客に向かい、ガディ・ガディは「そう思うかい？ ようし。言わせてもらうぞ？ ガディ・ガディを見ている。俺をよく見てるよ。」そしてバンドのほうに振り向き「ゆっくり。」と指示を出し、再び観客に向かい、「聞けよ。シッ。」といった後、次の歌詞を歌い始める。

「罪は男たちに耳や鼻に穴 (nose) を開けさせる。女の子の服を着てセクシーなポーズ (pose) を決めさせる。」彼は女性がよくするように腰に手を当て、ポーズをとってみせる。観客が大きく反応し、それを見たガディ・ガディは一度歌詞を中断する。バンドのほうに歩み寄り、「ゆっくり演奏しろって言っているだろ！」と声をかける。その間、観客は大笑いしている。女性たちが「ヒーヒッヒ！」「ヒャー！」と高く笑う声が響く。若い男性たちが手の指をピストルの形にし、頭上に掲げているのがいくつも見える。「ガン・サリュート」と呼ばれる、ダンスホール空間における賞賛のジェスチャーだ。

ステージ前方に戻ってきたガディ・ガディは、「俺だけがこんなにアティチュード<sup>27</sup>を持っているゴスペル・アーティストだぜ。誰か言ってくれよ、『アティチュード！』」観客から「アティチュード！」の音が返される。「もう一度準備はいいかい？ ガディ・ガディを見るよ。俺を見る。シッ！」という、ガディ・ガディは先ほどの箇所からもう一度歌う。今度は先ほど中断した箇所を通過し、次の歌詞へと続く。観客はまた先ほどと同じところで歓声を上げかけるが、ガディ・ガディがさらに歌うのをみて、再び注意深く彼の言葉を聞く。「罪は男たちにジャネットやパムを捨てさせる。マシーンもシェロンもだ。そしてチチ・マン (Chi chi man) <sup>28</sup>に変えてしまう。」ガディ・

<sup>26</sup> ジャマイカでは庭先などに植えられていることの多い果樹。メロンほどの大きさになるその果実は、焚き火で丸ごと焼いた後に、切り分けて水で炊く調理法が一般的。

<sup>27</sup> 英語の「態度 (attitude)」だが、ジャマイカでは、「度胸」「大胆さ」どの意味で肯定的に使われる。

<sup>28</sup> 同性愛者を指すパトワ語の語彙。

ガディは飛びのくように2,3歩下がり、モデルが歩くときのように足を交差させて歩いてみせながら次のように歌う。「罪は女の子たちにマッチ(matches)みたいにホットだと思わせる。そしてハゲタカが熱い灰(ashes)の上を歩くみたいなステップをさせるのさ!」これには、観客もこれまでで一番大きな反応を示す。

ここでとりあげたガディ・ガディのパフォーマンスからは、従来の「キリスト教徒」の男性イメージとは異なるものとしての彼の男性イメージが浮かび上がる。ガディ・ガディはダンスホールのパフォーマンス技法を駆使しているが、それは「キリスト教徒」として好ましくないと思われる攻撃性や横暴さを伴っている。例えば、彼のパフォーマンスの中で、ガディ・ガディが同性愛を間違いだと思ふ観客に手を挙げさせ、多くのジャマイカ人にとっては答えが明らかなこの質問に答えてほとんどの観客が手を挙げ、この行為によって会場に一体感を創出する技法が見られる。この同性愛者をスケープゴートにした一体感創出の技法は、ダンスホールでよく見られるものである。もっとも、同性愛はキリスト教的な罪でもあるため、同性愛者の批判自体は、教会の礼拝でも聞かれる。そこにもその罪を指摘することによって話し手と聞き手の間にある種の共同性の感覚を作ろうという狙いが無いとはいえない。しかしこのガディ・ガディのパフォーマンスの一場面に見られるようなあからさまなスケープゴート化、攻撃性はやはりダンスホール特有の技法だといえる。

これに加えて、「ガディ・ガディを見ている。俺をよく見てろよ。」「聞けよ。シッ。」「音量、音量!」「ゆっくり演奏しろって言ってるだろ!」などの、観客に対する彼の呼びかけやバンドに対する指示は、教会の礼拝では見られない、ある種の横暴さを含むものである。もっともペンテコステ派やその影響を受けた教会の礼拝でも、牧師と演奏者との掛け合いが展開され、その中で牧師から演奏者への指示が出される。しかしその場合にはここで見られるようなあからさまな命令ではなく、より微細な、目配せや手を使った合図であることが多い。会衆への注目を促す指示も同様である。

先に述べたように、ガディ・ガディは「牧師として叙任された」と自称している。Deejayと牧師という、教会がダンスホールを批判していることを考えれば一見相いれない二つの肩書を一身に体現しているのである。ここでみたパフォーマンスの中では、ガディ・ガディは牧師が体現すべきキリスト教の倫理とDeejayの体現する攻撃性や横暴さが両立可能なものであることを示して見せているといえよう。言い換えれば、キリスト教の倫理に反さない範囲で攻撃的な表現や横暴な振る舞いをするのが可能であることを彼は示して見せているのである。さらに彼は、性的な能力も、キリスト教の倫理に反さない範囲で表現することが可能であることをパフォーマンスの中で示して見せる。それはよくステージ上で披露する「証し」の中で示される。この「証し」<sup>29</sup>は彼が回心した際の体験に基づくものである。彼はかつてコミュニティでも有名なギャリスト(gyalist)<sup>30</sup>であったが、回心して妻だけに誠実になると、「ソフト」になったとあって嘲笑されるようになった。彼は最初そんな自分を恥じていたが、ある日神から語りかけられるという経験をした彼は、自分の行いに自信を持つようにな

<sup>29</sup> Testimony のこと。「証し」または「信仰告白」と訳されることが多い。これは人々の面前で自分が回心するにいたった経緯や、生活の中で神の恵みを得た体験を語ることである。

<sup>30</sup> パトワ語で、「女たらし」のこと。称賛を込めた意味合いで使われることが多い。

る。あるとき教会に通う彼に向かって男たちが近づき、「あっちに行け！古ぼけワン・バーナー！」と擲諭を飛ばす。「ワン・バーナー」とは、火口がひとつだけの調理コンロのことであり、一度に一人の異性しか相手にできない者への侮蔑表現でもある（Branche 1998: 195）。この擲諭に対してガディ・ガディは、次のようにやり返す。

俺はただ、ふんぞり返ってポーズをとり、腰に手を当てて彼を見つめ、言ってやったんだ。「いいか、聞けよ。ワン・バーナーのほうがいいんだ。なぜならワン・バーナーのほうが調理ガスは長持ちするからな！」

筆者は彼がステージでこれと同じ語りを行うのを何度か見たことがあるが、必ずこの箇所では会衆は笑いの渦に包まれる。観衆に笑いをもたらしめているのは、ガディ・ガディが彼に向けられた「ワン・バーナー」との擲諭に対して、キリスト教的な倫理規範の主張（「神は婚外性交渉や婚前性交渉を禁じている」）という正論で対抗するのではなく、相手の鼻をあかすような切りかえし（「ワン・バーナーのほうが性的な力が持続する」）を行っていることである。ここではガディ・ガディは性的能力を証明する方法をいわば「多発性」から「持続性」へとずらすことによって、キリスト教的な倫理の枠内で自らの性的能力の強さを主張することを可能にしているのである。

#### 4.2 プロディガル・サンのパフォーマンス

次に、プロディガル・サン<sup>31</sup>（Prodigal Son）という名のゴスペル Deejay のパフォーマンスを見ていきたい。プロディガル・サンもガディ・ガディと並び、現在のダンスホール・ゴスペルを代表するゴスペル Deejay の一人である。彼はおそらく最も成功したゴスペル Deejay だと言えるだろう。彼の曲のいくつかは、ダンスホール音楽一般の音楽チャートでも上位にランク・インしたことがある。プロディガル・サンはこれまで3枚のアルバム CD を発売している。毎年8月に「リチャージ（Recharge）」という大型のゴスペル・コンサートを主催している。また音楽レーベルも運営しており、他のゴスペル・アーティストたちのマネジメントも行なっている。

そのような成功の一方で、2008年にはマネージャーを務めていた妻との離婚騒動が話題にもなった。離婚の原因は明らかにされていないが、彼の浮気が原因だという噂を筆者はしばしば耳にした。そうでなくとも、離婚は聖書で禁じられており、「罪」だと考える傾向が「キリスト教徒」の間では強い。プロディガル・サンらゴスペル Deejay たちは、音楽によって福音を伝道するという立場をとっており、また「キリスト教徒」の若者たちにも絶大な人気がある。そのような彼らには当然、そのような「罪」に染まらない男性イメージを体現することが求められる。ゴスペル Deejay として活動している者の中には「あれはほんとに恥だよ。」と苦言を呈する者もいた。

<sup>31</sup> プロディガル・サン（放蕩息子）という名は、聖書でイエスが語る例え話（「ルカによる福音書 15章 11～32節」）にちなんでいる。ある人の二人兄弟のうち、弟は家を出てもらった財産を放蕩で使いつくした後に悔い改めて帰ってくるが、父親は彼を温かく迎え入れるという話である。プロディガル・サンは、父なる神のもとに帰ってきた自分の姿をこの放蕩息子に重ねているものと思われる。

年齢は30過ぎで、体格は中肉中背である。服装は、あるときは三つ揃えのスーツ、あるときはTシャツとジーンズでラフに、あるときはベストやマフラーなどを着用し、様々に演出される。

彼のDeejayのスタイルには、ガディ・ガディのような技術の高さは感じられない。彼の成功は、むしろ彼の過去の経歴を利用した、イメージ演出によるところが大きいように思われる。

プロディガル・サンは、首都キングストンの隣に位置するセント・キャサリン教区の田舎で祖母に育てられている。13歳のときに祖母が亡くなり、彼はキングストンの悪名高いインナー・シティ、リマ(Rema)で暮らすようになり、ギャングの一員として銃を手にしていった。彼は1997年に回心している。彼が回心に至った経緯はメディアやステージ上では語られていないようである。著者も残念ながら彼にはインタビューできておらず、その点の確認はまだ取れていない。

彼がDeejayとしての活動を始めたのは回心してからである。彼をゴスペルDeejayとして育て上げたのはダニー・ブラウニーがという人物である。彼は1990年代のダンスホール音楽界のトップ・プロデューサーでありながら、1998年に回心し、それ以降は世俗のダンスホール音楽のプロデュースを止め、ゴスペル音楽を専門にプロデュースしている。

彼のイメージ演出を、彼のパフォーマンスの様子を通してみたい。2009年4月2日(木曜日)に首都キングストンのマックスフィールド通り(Maxfield Avenue)で行われた伝道集会<sup>32</sup>で、プロディガル・サンがゲスト・アーティストとしてパフォーマンスを行った。マックスフィールド通りはキングストン市内でも犯罪の多発で名高い場所である。この日この伝道集会が行われているのは、同地区出身で前年の北京オリンピックの陸上競技で金メダルを取ったウォーカー選手(Melaine Walker)の壁画の正面である。壁画の隣にある日用品店の前にベニヤ板の小さなステージが組み、その両脇に高さ3メートルほどの大きなスピーカーが積み重ねられている。ステージの斜め後方に立てられた折りたたみ式テーブルの上には、ミキサーやターンテーブルなどの機材がセットされており、それをMCの男性が操作する。

ステージを照らす照明は無く、街灯だけがあたりを照らしている。ざっと見渡すと、聴衆の人数は50名くらいだろうか。多くは女性だ。服装は着の身着のままといった感じだ。音につられてちょっと表に出てきた、といった感じの服装の人が多く、多くは歩道に立ち、車道のほう、あるいはステージのほうを向いている。壁にもたれかかっている人や、物売り用のテーブルらしきものに腰掛けている人もいる。教会の集まりでは見られない、短いスカートをはいた若い女性たちも数人いて、踊っている。子供たちがステージに腰掛け、それを見ている。ダンス向けの人気曲がかけられるときには、踊る人々が車道を占拠するように闊歩する。さも楽しげに積極的に踊っている人もいれば、軽く体をゆするだけの人も、腕組みをして遠巻きに傍観している人もいる。

MCの紹介を受けてステージに上がったプロディガル・サンは、拍手で迎えらる。ごく

<sup>32</sup> この伝道集会は、プレイズ・ハウス・ボンバーズ(Prayz House Bombards)という、ダンスホール・ゴスペルを用いた伝道活動を行っているグループによって行われたものである。このグループはあるラジオ局のゴスペル番組のラジオDJを務めていた男性が率いている。このグループが活動を行うのは、主に「インナー・シティ」と呼ばれる地域である。その地域の教会と協力して日時と場所をセッティングする。そしてその男性が所有するサウンドシステムの用意とゴスペル・アーティストたちの手配を行う。

小さなステージだが、ステージ衣装と呼べる身なりをしている。デザインの入ったジーンズ、チェック柄のセーター、マフラーに帽子という亜熱帯のジャマイカの気候を考えれば暑苦しいであろう服で着飾っている。これはジャマイカではあまり見ないファッションである。

マイクを持った彼は観衆と少し言葉を交わした後、すぐに用意した音源をかけるようにMCに指示する。スピーカーから流れてきたのは、彼のヒット曲「ケッチ・ア・ファイア(‘Ketch a Fire’)」<sup>33</sup>。伝統的な賛美歌の雰囲気と現代的なダンスホールのリズムを併せ持つ曲である。この手の曲は特に女性や子供に人気がある。このときも音源がかかると瞬時に、何人かの女性が曲を認識し、熱狂的な歓声を上げ、踊り始める。この曲を歌い終えた後、プロディガル・サンは次のように述べた。

俺たちはゲッターの出だよ。俺たちはギャリソン(garrison)・ピープルさ。わかるかい？俺たちはギャリソンを心から愛している。俺たちは代表するのを止めないよ、たとえば……俺たちはキリスト教徒だけど、一生ギャリソンさ。

ジャマイカでは「ギャリソン」という語は、地域のギャング集団およびそれがコントロールする地域を指す言葉として使われる<sup>33</sup>。プロディガル・サンは回心する以前にはガンマンであったということを公にしているが、彼は「キリスト教徒」となった今でも「ギャリソン」であるという。「ギャリソン」は銃犯罪のイメージと結びついており、当然キリスト教の倫理観とは相容れない。自身を「キリスト教徒」でありながら「ギャリソン」でもあるとするプロディガル・サンの自己提示は、聞く者に違和感を覚えさせるものであるが、彼はあえてそのような男性イメージを提示している。

この語りについて、彼は自分の楽曲を3曲パフォーマンスした。最初の曲は、「頭を冷やせ(‘Head Cyaan Hot So’)」<sup>34</sup>。これは彼の最新曲で、ビデオも作られ、テレビで放映されている。ダンスホール音楽のランキング・チャートでも、上位にランク・インした曲で、「キリスト教徒」ではない人たちの間でも人気がある。コーラス部分では「みんな、そんなに頭を熱くするなよ / 友達から挑まれればすぐに殺す / 赤子をレイプ<sup>34</sup>、それがお前らの向かった先か / 言っとくぞ、父なる神様はお前を見てるぜ」と歌われるが、聴衆はこの部分を一緒に歌っていた。この曲のほかの部分では、「ギャングスタ、本当のことを教えてくれよ、ギャングスタ / 本当のギャングスタはアナンダ<sup>35</sup>を殺したりしないだろ / もし 666 がお前のスポンサーなら / お前は神に答えないといいないってことを覚えとけよ」と歌われる。ここには「ギャングスタ」に対して、「本当のギャングスタはアナンダを殺したりしないだろ」と、ギャングス

<sup>33</sup> キングストンには「ギャリソン・エリア」と呼ばれる区域が数多く存在する。ジャマイカの二大政党、PNP (People’s National Party) と JLP (Jamaica Labour Party) は、1930年代に形成されて以来、地域コミュニティに根ざした選挙活動で票を獲得し、その見返りにその地域コミュニティのインフラストラクチャの改善や住民への職の斡旋を行うというやり方で政治を行ってきた。その結果として各党の支持区域が形成された。さらに1970年代には各政党の政治家が自分たちの支持区域のギャングに銃を支給し、自分たちの区域をコントロールさせ、反対政党の支持者を襲撃させたといわれる。このように政治とギャングが地域コミュニティにおいて癒着することによってギャリソン・エリアは形成された。1990年代にはギャングは麻薬の密輸によって資金を得るようになり、政治家たちに頼らなくなったが、地域コミュニティに根ざした政治は続き、ギャング間の抗争による殺人事件数はむしろ増加している。

<sup>34</sup> 2008年には子供に対する性的暴行や誘拐殺害事件の報道が連続した。

<sup>35</sup> アナンダは2008年に誘拐殺人事件の被害にあった女兒の名前。

タの本質を肯定的に捉えた発言がみられる。

次に歌った曲は、「溶岩の大地（‘Lava Ground’）」<sup>36</sup>。若い「キリスト教徒」の間で大変人気がある曲だ。「銃を持っているかのように聖書を撃て」と歌われる曲では、「ブラッダッダッダッダッダ、悪霊の血を流させろ！」など、銃声を模した歌詞が歌われ、人々の反応もそこが最も大きい。ここでは銃は聖書にもとづいた言葉を発することの比喩として使われているが、やはり銃を持った「ギャリソン」的なイメージも喚起され、それが人々に喜ばれているといえる。

3つ目の曲は、「ギャリソンへ戻れ（‘Back to the Garrison’）」<sup>37</sup>。この曲では、実在の地域名や人物名を使って、ギャリソン・コミュニティの「ドン」に代わる存在として有名な牧師やゴスペル・アーティストたちを送り込むイメージが歌われる。

この3曲をパフォーマンスした後、彼は過去に自分は長く「世界（world）」で生きてきたが、それでも神を愛していた、という語りを行った。

シャッタ<sup>36</sup>たちは皆、俺がかつてストリートを仕切っていたことを知っているよ。俺たちは……俺たちはブローニング銃を前のポケットに入れ、青いバイブル<sup>37</sup>を後ろのポケットに入れていた。それからたぶん、真ん中のポケットにはウィード（マリファナ）の袋が一つ。そんな感じだったよ。だっているいろいろなことが起こっている中で、それでも俺たちは「ああ、神様」と言ったもんだ。だって俺たちはその方がすべてをお造りになったことを知っているからね。わかるかい？だから俺たちは男たちに言うよ。「よう。無意味な殺しは何にもならないぜ」って。

このようにプロディガル・サンは「キリスト教であるがギャリソン」というアイデンティティをもっており、彼がステージ上で表現する男性イメージはそのアイデンティティに基づいたものであり、またそれを補強するものでもある。ガディ・ガディの場合と同じく、プロディガル・サンの表現する男性イメージも、従来の「ソフト」な「キリスト教徒」というイメージを払しょくし、「キリスト教徒」とは相容れないと想定されがちなものを含みこんだアンビバレントなものであるということが出来る。ただし、プロディガル・サンのほうは自分が過去に「ギャリソン」「ギャングスタ」であったという事実が彼がアーティストとして活動するうえで持つメリットを自覚し、それを積極的に利用したイメージ作りを行っている。このように、回心前の自己との継続性を強調することは「キリスト教徒」になるにあたって「生まれ変わり（born again）」を強調するペンテコステ派が主流のジャマイカでは批判を招きやすいものである。

#### 4.3 ダンスホール・ゴスペルが教会コミュニティに与える影響

ガディ・ガディもプロディガル・サンもアンビバレントな「キリスト教徒」男性のイメージを体現している。これは他の多くのゴスペル Deejay たちにも言えることである。2章でみたように、先行研究の中では、牧師や説教師などがこのようなアンビバレントな男性イメー

<sup>36</sup> シャッタ（*shotta*）は英語の shooter から派生した語。ガンマンと同じ意味で使われる。

<sup>37</sup> 街頭で無料で配布されているポケットサイズの聖書。

ジを持っているということがいわれてきた。ゴスペル Deejay たちが体現する男性イメージも、基本的にはこれと同じ種類のものだと言える。しかしながら、牧師や説教師の場合にはそのようなアンビバレントさはおそらく本人の意思に関わらず自然に現れてくるものであるのに対し、ゴスペル Deejay たちの場合には、それは意図的に操作され、アーティストとしての活動のために積極的に利用されている点に違いがあるといえよう。

このようなアンビバレントな「キリスト教徒」男性のイメージがダンスホール・ゴスペルを通して称揚されるようになったことにより、教会コミュニティは以下の二つの側面で影響を受けている。まず一つ目は、教会内部の若者たちへの影響である。従来教会コミュニティには、若い「キリスト教徒」男性たちが肯定的な自己イメージを持ちにくいという事情があった。その理由の一つは、2章でみたように、彼らが外部の男性たちから「ソフト」として軽蔑されるということである。さらにそれに加え、もう一つ次のような事情もある。「男性は女性を導く立場にあるべき」というのがジャマイカの「キリスト教徒」の男女の共通理解である。したがって、教会コミュニティの大多数が女性であるにも関わらず、牧師や長老 (elder) 、執事 (deacon) といったリーダー的な役割は、ほぼ男性によって占められている。このようなリーダー的な役割において自己の能力を示すことは、教会コミュニティにおいて、男性たちが肯定的な自己イメージを築くために重要なことである (Austin-Broos 1997: 123)。しかし、リーダー的な役割には年配の男性が就くことが多く、若い男性に自己の能力を表現する機会が与えられることは少ない。そのため若い「キリスト教徒」男性は肯定的な自己イメージを持ちにくいのである。

ところがゴスペル Deejay たちが人気を得たことにより、教会コミュニティ内の若い「キリスト教徒」男性たちがそれを模して Deejay のパフォーマンスをするようになった。このことが状況を変えつつある。例えば、17歳のAがゴスペル Deejay を始めたのは、ある他のゴスペル Deejay が教会の催しでパフォーマンスをし、少女たちから賞賛を受けているのを目にしたのがきっかけだった。自分もそのような賞賛を浴びたいという思いからゴスペル Deejay をはじめ、その後「キリスト教徒」になったという。

このAの例にみられるように、ゴスペル Deejay を模して教会の催しで Deejay をすることは、女性たちの前で自分の能力を証明し、肯定的な自己イメージを得ることを可能にする。また、ゴスペル Deejay をする若者たちは、英語ではなく、彼らが日常会話で使っているパトワ語で表現することができる。これも彼らが自分のメッセージをより自然に表現することを可能にしている。さらに彼らは、ガディ・ガディやプロディガル・サンのような成功したゴスペル Deejay たちに倣い、歌の中で悪魔や誘惑、墮落などとの戦いを武器や戦争などの比喩を使って表現することで、自分の強さを表現できる。このことも、彼らが肯定的な自己イメージを築くのを助けているといえる。

ゴスペル Deejay を模してパフォーマンスを行う若い「キリスト教徒」男性だけでなく、教会コミュニティの若者グループもゴスペル Deejay の男性イメージの影響を受けている。ゴスペル Deejay たちのアンビバレントな男性イメージは、教会の若者たちが教会コミュニティの中で年配者や指導者に対する対抗的なアイデンティティを形成するのを助けている。のである。

例えば、私があるゴスペル Deejay に随伴して訪れた、あるペンテコステ派教会の若者たち

の催しでも、そのような対抗的なアイデンティティの形成をうかがうことができた。この催しはその教会の青年部（Youth Ministry）によって、教会ホールの屋上にあるレクリエーション・スペースで行われていた。ゴスペル Deejay とともに会場に到着した直後、この教会が比較的古風なペンテコステ派教会であることを知っていた私は、この教会でダンスホール・ゴスペルを使ったイベントをやっていることを意外に思い、私たちを出迎えたリーダーの少女にそのことを話した。するとその少女は、「さっきも音楽を流していて年配の人から文句を言われたわ。教会でなんて音楽をながしているんだ、って。だけどこれは私たちの催しだし、私たちの音楽よ。誰にも止められないわ。」と話していた。後にこの教会の牧師が、確かにダンスホール・ゴスペルに対して批判的を持っていることが確認できた。

この少女の言葉に表れているように、教会コミュニティの若者たちは、教会コミュニティの年配者や指導者たちの不理解と自分たちの正しさを強調しながらダンスホール・ゴスペルを使うことによって、教会コミュニティ内の権威や体制に対しての対抗的なアイデンティティをつくりだしている。それは従順ではない、戦う者としてのアイデンティティである。それは自らをラディカルな存在として演出しているゴスペル Deejay たちのイメージに響いたものであると言えよう。

ゴスペル Deejay の男性イメージが教会に与えている影響の二つ目は、教会コミュニティとその外部との関係に及ぼされる影響である。2章でみたように、「キリスト教徒」男性は「ソフト」であると外部の男性からしばしば軽蔑される。このため、「キリスト教徒」男性は3章でみたガディ・ガディの「証し」に見られたような劣等感をもつことも少なくない。ゴスペル Deejay の男性イメージはこの劣等感の払拭に役立っているのである。

例えば、23歳のBは精力的に活動する駆け出しのゴスペル Deejay である。彼は目立って身長が低く、そのことで人から笑われることもある。しかし、彼はそれを逆にとり、歌の中では「ガンマン」「バッドマン」と対峙して「罪とは高い建物のようなもの。悪魔が押せば、おまえはすぐに死んでしまうぞ。」とひるむことなく説得する様子をうたう。パフォーマンスの際には、目の前に立つ「ガンマン」「バッドマン」を下から見上げるようにして語りかけるポーズをとり、人々を笑わせている。

これは、「ガンマン」「バッドマン」を踏み台とした、自己の能力の演出としてとることができる。ガディ・ガディやプロディガル・サンはパフォーマンスの中で非「キリスト教徒」を断罪していた。そのやり方は、彼らを模してゴスペル Deejay をやっている若い「キリスト教徒」たちにも引き継がれている。これによって、彼らは「ガンマン」「バッドマン」に代表されるような非「キリスト教徒」男性との力関係をそのパフォーマンスの中で転覆することができ、それによって彼らに対する劣等感を払拭することができるのだろう。

さらにゴスペル Deejay たちの男性イメージには、教会コミュニティが行う伝道活動において効果をもつものだという期待がなされている。たとえば、インナー・シティの路上や広場で、その近隣にある教会と協力して、ダンスホール・ゴスペルの音源やゴスペル Deejay のパフォーマンスを中心とした伝道集会を行っている男性Cは、その活動中のMCでしばしばそのような考えを語っていた。ある夜、その伝道集会であるゴスペル Deejay がパフォーマンスをしている最中に、集まっていた女性の何人かが不快感を表現するしぐさをしたため、そのゴスペル Deejay はパフォーマンスを途中で打ち切った。彼からマイクを受け取ったCは、こ

のゴスペル Deejay をかばうようにして、「私たちが話しかけることができない男たちに話しかけていたんだ」と人々に弁明をはじめた。教会に寄りつかない男性たちは、ラフで粗暴な話し方で、リーズニング(論じ合い)をしている。だから自分たちは彼らにあわせて、「男性たちに届くゴスペル」を彼らに与えなければいけないのだ、とCは語った。ここでは、Deejay という歌唱法とダンスホールという音楽形式が伝道において有効であることが主張されている。「彼ら」のやり方に合わせることで、「彼ら」にメッセージを届けることができるというのである。ゴスペル Deejay の服装や、態度、人づきあいなども、これと同じような論理で正当化されるのをしばしば耳にする。それらを総合的にイメージ化するのがゴスペル Deejay たちが体現する男性イメージである。その男性イメージには伝道の場面で効果をもつことが期待されているといえる。

## 5. おわりに

ここでみたダンスホール・ゴスペルの事例に見られるような、男性イメージが集団や社会に影響を与える過程は、1章で整理した、カリブ海地域の男性性研究に見られる三つのパースペクティブでは捉えることができない。

黒人男性の周縁性をめぐる議論のように男性の位置づけを見ようとするパースペクティブでは、ゴスペル Deejay たちが「キリスト教徒」としては非典型的な存在であり、それゆえ教会コミュニティの中では周縁に位置しながらも、しかしそれによりむしろ力を持っているということを見逃してしまうだろう。教会コミュニティの若い男性たちも、ゴスペル Deejay たちの男性イメージを模することで肯定的な自己イメージを獲得し、あるいは対抗的なアイデンティティを形成し、力をつけつつあるといえる。「周縁」という語はそこにおける力の不在をほのめかすものであるがゆえに、周縁的位置における力の形成を捉えることができない。

男性の意識面に注目し、規範意識や理想を取り上げるパースペクティブでは、教会コミュニティの中に存在する立場の差異や、また「キリスト教徒」男性と非「キリスト教徒」男性の間に存在する差異と関係性を捉えることができない。ましてその関係性が変化していく様子は規範意識や理想からだけでは説明することができない。

男性性を「覇権」という固定的な力関係のみに限って考察しようとするパースペクティブでは、状況によって変化する入り組んだ関係性の動態を捉えることができない。例えば社会全体を俯瞰すれば社会的に共有された倫理道徳を体現すると見なされる「キリスト教徒」男性のほうが理想とされ、その意味では力を持っているといえるが、男性どうしの日常的で対面的な場面では、「キリスト教徒」男性は非「キリスト教徒」男性から嘲笑されることがしばしばあり、その意味では力を持っていないといえる。覇権的男性性概念はこのような入り組んだ力関係の状況を捉える事が出来ない。ましてや男性イメージが教会コミュニティ内部と外部の関係性にもたらす影響は考察不可能である。男性ジェンダーの変化やそれと関連した社会的な変化は、「覇権」を確立させる文化的理想と制度的権力の一致よりも、むしろそのずれから生じてくる。言いかえれば、「覇権」が確立していない、複雑な権力関係が存在する状況にこそ、男性ジェンダーの変化を捉えるためには注目する必要があるのだ。

では、どのような概念を用いれば、ダンスホール・ゴスペルの事例に見られるような男性

イメージが集団や社会に与える影響を考察することができるだろうか。ダンスホール・ゴスペルの場合、その影響が及ぼされる過程で重要な要素となるのは、「パフォーマンス」と「模倣」であろう。ならば、その過程を捉えることが期待できるのはジュディス・バトラーのパフォーマティビティの概念である。バトラーはジェンダー・アイデンティティを「パフォーマティブに」、つまりパフォーマンスを通して構築されるものと考えている。そしてそのパフォーマンスは様式的な反復行為であるという（バトラー 1999: 247）。またバトラーはパフォーマンスという語に、「強制的な社会的虚構」が求める目標を「遂行（パフォーマンス）」するための行為という意味と、「他の儀礼的な社会ドラマと同様に」、反復的に「演じ」られ、「経験される」ものという意味を持たせている。

また重要なのは、このパフォーマンスは失敗の可能性をもつ「模倣」であり、それは時としてアイデンティティに「攪乱」をもたらすパロディ的な「模倣」となり得、その反復によって構築されるジェンダーは変容される可能性を持っているということである（バトラー 1999: 247-48）。

ゴスペル Deejay たちが、「キリスト教徒」のイメージと「バッドマン」「ギャングスタ」のイメージを操作しながら体現していることは、バトラーのいうパロディ的な模倣であるといえるだろう。その模倣のパフォーマンスを通して、彼らは「キリスト教徒らしさ」という「社会的虚構」を見る者に問い直させる力をもっているといえることができる。

しかし、ゴスペル Deejay たちのイメージの構築が、「キリスト教徒」と非「キリスト教徒」という二つの集団の差異と関係性を土台として行われており、彼らの作り出した男性イメージもその二つの集団の差異と関係性を变化させるかたちで影響しているということは、イデオロギーと個人的な行為者の関係のみに注目したバトラーのパフォーマティビティの概念だけでは捉えきることができないだろう。この点で、「彼女のエージェント論に欠如しているのは共同性という視点である」という田中のバトラー批判は的を得ているといえよう（田中 2002: 350）。田中はバトラーのパフォーマティビティとレイヴとウエンガーによる「実践コミュニティ」の概念を接合し、「パフォーマティビティのコミュニティ」という概念を提唱している。田中によると「パフォーマティビティのコミュニティ」とは社会そのものであり、日常生活は権力との不断の交渉の場となる（田中 2002: 354）。

これは確かにバトラーのパフォーマティビティの概念では捉えることができない、教会コミュニティ内部へのゴスペル Deejay の男性イメージの影響を捉えることができる概念である。しかしその一方で、男性イメージの構築が集団の外部との関係性にも規定されながら形作られると同時にその関係性を变化させるという側面を捉えることができないという点で欠点を残している。現在の社会では、アパデュライのいうように、それぞれの行為者は集団や社会の枠を超えた「スケープ」の中に置かれていると考えるべきである（アパデュライ 2004: 69-70）。そのような外部との関係性の中で、行為者がどのように想像力を働かせ、それによって実践をかたちづくり、またそれを他者のそれと交渉させていくのか。田中の「パフォーマティビティのコミュニティ」の概念をアパデュライの「近接（ネイバーフッド）」の概念と接合し、「パフォーマティビティの近接」という概念を構想し、これを男性イメージが集団さらには社会に与える影響を考察するための概念とすることもできるかもしれないが、この模索はまた別稿で行うこととしたい。

## 謝辞

本稿を GCOE プログラム「生存基盤持続型の発展を目指す地域研究拠点」よりワーキング・ペーパーとして印刷するご支援をいただいたことに感謝申し上げます。



写真1： *Fun in the Son 2009* でパフォーマンスするガディ・ガディ



写真2： *Fun in the Son 2009* ステージ遠景



写真3： マックスフィールド通りで行われた伝道集会でパフォーマンスするプロディガル・サン

## 参考文献

- Austin (-Broos), Diane. J. 1997. *Jamaica Genesis: Religion and the Politics of Moral Order*. The University of Chicago Press.
- Baritteau, Eudine. 2003. Requiem for the Male Marginalization Thesis in the Caribbean: Death of Non-Theory. In *Confronting Power; Theorizing Gender: Interdisciplinary Perspectives in the Caribbean*. Eudine Baritteau (ed.), pp. 324-355. University of the West Indies Press.
- Beckles, Hilary. 2004. Black Masculinity in Caribbean Slavery. In *Interrogating Caribbean Masculinities: Theoretical and Empirical Analyses*. Rhoda Reddock (ed.) pp. 225-43. University of the West Indies Press.
- Branche, Clement 1998. Boys in Conflict: Community, Gender, Identity and Sex. In *Gender and the Family in the Caribbean*. Wilma Bailey (ed.) pp. 185-201. Institute of Social and Economic Research, University of West Indies.
- Brown, Janet and Barry Chevannes. 1998. *Why Man Stay So: An Examination of Gender Socialization in the Caribbean*. The University of the West Indies.
- Brown Janet, Arther Newland, Patricia Anderson, and Barry Chevannes. 1997. Caribbean Fatherhood: Underresearched, Misunderstood. In *Caribbean Families Diversity Among Ethnic Groups*. Jaipaul L. Roopnarine and Janet Brown (eds.), pp.85-113. Ablex Publishers.
- . 1999. What We Sow and What We Reap: Problems and the Cultivation of Male Identity in Jamaica. In *Annual Grace Kennedy Foundation Lecture*, Kingston Jamaica.
- Chevannes, Barry. 1989. Drop Pan and Folk Consciousness. In *Jamaica Journal* 22 (2):45-50.
- . 1993. Sexual Behaviour of Jamaicans: A Literature Review. In *Social and Economic Studies* 42 (1): 1-45.
- . 1999. What We Sow and What We Reap: Problems and the Cultivation of Male Identity in Jamaica. In *Annual Grace Kennedy Foundation Lecture*, Kingston Jamaica.
- Clark, Edith. 1966(1957). *My Mother Who Fathered Me: A Study of the Family in Three Selected Communities in Jamaica*. George Allen & Unwin Ltd..
- Connell, R. W. 2005(1995). *Masculinities* (2<sup>nd</sup> edition). University of California Press.
- . 2005. Globalization, Imperialism, and Masculinities. In *Handbook of Studies on Men & Masculinities*. Michael S. Kimmel, Jeff Hearn, and R. W. Connell (eds.), pp. 71-89.
- Cooper, Carolyn. 2004 . *Sound Clash: Jamaican Dancehall Culture at Large*. Palgrave Macmillan.
- De Moya, E. Antonio. 2004. Power Games and Totalitarian Masculinity in the Dominican Republic. In *Interrogating Caribbean Masculinities: Theoretical and Empirical Analyses*. Rhoda Reddock (ed.), pp. 68-102. University of the West Indies Press.
- Davenport, William. 1961. The Family System in Jamaica". In *Social and Economic Studies* 10(4): 421-454.
- Downes, Aviston D. 2004. Boys of the Empire: Elite Education and the Construction of Hegemonic Masculinity in Barbados, 1875-1920. In *Interrogating Caribbean Masculinities: Theoretical and Empirical Analyses*. Rhoda Reddock (ed.) pp. 105-36. University of the West Indies Press.

- Gutmann, Matthew C. 1997. Trafficking in Men: The Anthropology of Masculinity. In *Annual Review of Anthropology* 26: 385-409.
- Hope, Donna P. 2006. *Inna di Dancehall: Popular Culture and the Politics of Identity in Jamaica*. University of the West Indies Press.
- Lewis, Linden. 2004. Caribbean Masculinity at the Fin de Siècle. In *Interrogating Caribbean Masculinities: Theoretical and Empirical Analyses*. Rhoda Reddock (ed.), pp. 244-66. University of the West Indies Press.
- Figueroa, Mark. 2004. Male Privileging and Male 'Academic Performance' in Jamaica. In *Interrogating Caribbean Masculinities: Theoretical and Empirical Analyses*. Rhoda Reddock (ed.), pp. 137-166. University of the West Indies Press.
- Lindsay, Keisha. 2002. Is the Caribbean Male an Endangered Species? In *Gendered Realities: Essays in Caribbean Feminist Thought*. Patricia Mohanmmmed (ed.), pp. 56-82. University of the West Indies Press.
- Messner, Michael A. 1993. "Changing Men" and feminist Politics in the United States. In *Theory and Society* 22 (5) : 723-38.
- Miller, Errol. 1986. *Marginalization of the Black Male: Insights from the Development of the Teaching Profession*, Institute of Social and Economic Research, UWI.
- Parry, Odette. 2004. Masculinities, Myths and Educational Underachievement: Jamaica, Barbados, St. Vincent and the Grenadines. In *Interrogating Caribbean Masculinities: Theoretical and Empirical Analyses*. Rhoda Reddock (ed.), pp. 167-224. University of the West Indies Press.
- Reddock, Rhoda E. 2004. Interrogating Caribbean Masculinities: An Introduction. In *Interrogating Caribbean Masculinities: Theoretical and Empirical Analyses*. Rhoda Reddock (ed.), pp. xiii-xxxiv. University of the West Indies Press.
- Smith, Ashley. 1987. Pentecostalism in Jamaica. In *Jamaica Journal* 42:3-13.
- Smith, Raymond T. 1996. *The Matrifocal Family: Power, Pluralism, and Politics*. Routledge.
- Stolzoff, Norman C. 2000. *Wake the Town and Tell the People: Dancehall Culture in Jamaica*. Duke University Press.
- Vassel, Samuel C.W. 1997. *Understanding and Addressing Male Absence from the Jamaican Church*. PhD Thesis, United Theological College of the West Indies.
- Wilson, Peter. 1969. Reputation and Respectability: A Suggestion for Caribbean Ethnography. In *Man* 4(2): 70-84.
- アパデュライ、アルジュン。 2004。『さまよえる近代—グローバル化の文化研究』門田健一訳、平凡社。
- バトラー、ジュディス。 1999。『ジェンダー・トラブル——フェミニズムとアイデンティティの攪乱』竹村和子訳、青土社。
- 田中雅一。 2002。『主体からエージェントのコミュニティへ』田辺繁治・松田素二編『日常実践のエスノグラフィ —— 語り・コミュニティ・アイデンティティ』世界思想社。 Pp.337-60。

< 統計資料 >

*Jamaica Population Census 2001*. Statistical Institute of Jamaica.

< ウェブ資料 >

Register General's Department, Government of Jamaica, "2003 Vital Statistics," 2006,

<http://www.rgd.gov.jm/2003-Vital-Statistics> (30 October 2009)